

妹長青 萬木

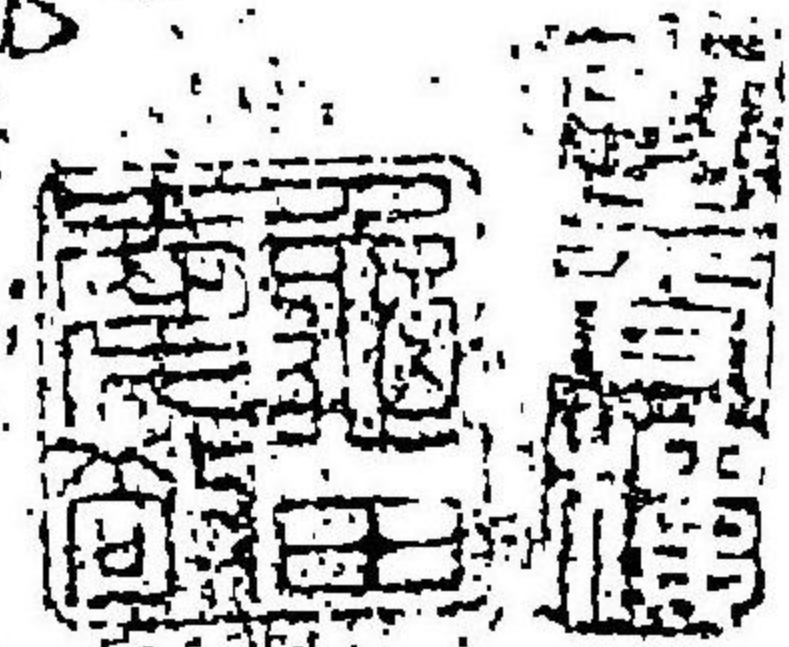
913.58
Ta624 P



東京
日吉堂
藏版

妹

913.58



713.58 Tab 29 R

序
 木佛を焼て霜朝を凌ぎしハ悟りすぎたる悪洒落もて益樹を伐く雪夜
 を煖めしハせんかたあさの御馳走なり苦しくも降来る雨かみわの崎
 さの渡に家もあらずと詠たりし萬葉集に歌あれば駒とめく袖
 うち拂ふかけもなしさの渡の雪の夕ぐれと暮擲られたりされを詠
 歌に等類あり其角ハ句集に兄弟あり物みあ對ひり似く非ありそこ
 に趣向あるからずやハと思ふもけから疑ふねども薪は樵りし鎌倉を小
 田原にせし北條時代肥佐野常世を次郎左衛門より直しくかさつ
 をたのむりの色の八橋の蜘蛛手に實登る姫萬兩ハ妹伏れ縁日物ながら
 忠信節義の鉢ハ木と並立たる室ハ梅五葉ハ小松こさませて櫻よ壽く
 新案新版巻の端の半頁ハ書工の可寸利と吉例かはらず序ハしい事を
 序めかしと序す

文政九年丙戌春正月吉日開鐫

曲亭馬琴戲述



336963

北條長氏入道



鉢崎娘小櫻

挾野次郎左衛門常命



傾城八橋

通

四 姫萬兩長者廻鉢木目錄

第一回 鉢崎渡六の嬢兒出生の事

第二回 伊勢新九郎神の示現と蒙る事

第三回 佐野源東吾若梅を奪ふ事

第四回 伊勢新九郎若梅を妻とふ事

第五回 渡六旅中ニ病死の事

第六回 八橋及佐野次郎左衛門身の脩りの事

目錄終

姫萬兩長者廻鉢木

東都 曲亭馬琴戲



第一回 鉢崎渡六の嬢兒出生の事

從時足利義尚公の京都に將軍たりし文明年中のことかとよ大和國三輪が崎野わたりの片邊に鉢崎渡六といふ武士の浪人ありけり最弱かりし其とじめの久しく京家は奉仕へつゝ軍學の達人ありし或時のためかひは膝頭を敵に射らるゝ是より歩行不自由をば身の暇をさまひりて故郷大和の三輪が崎にありて隠れて軍學の指南して世をさるははと妻の深雪妊娠て當る十月やとく産かどせし三子みてまかも威女子なり渡六のぞみを失ひて最わさましと思へとも領主よりの扶持を賜ひり近隣の里人ことぶき祝しててもとやそと大方なれば渡六の己ことを得ずとじめに産れしを若梅とあづけて第一の姉と定め次を姫松次を小櫻とぞ名稱ける元來三子のことなれば容貌の酷肖たるに玉を欺くばかりおれ彼の吳竹の節より産れし赫夜姫もこれに優さしと人々を頻り愛でうらやまて其の成長をまぢわびたる父母の心ハ一入にてかさしの花と愛しむ春の木梢は秋の月滿れば欠るならひにて長女の若梅ハ年輪三四ツに成るまでも絶てものいふことの無ければ二親ハ種々に神よ祈念醫藥をいどめて療治よころを盡せども生れつきたる啞なればや些の効顯の無かりしハ只これ玉と瑕ありと人さへいへば親ハなほ心苦く思ひけり然るも其頃おあじ里は佐野源五左衛門時命といふ郷士あり是も亦鉢崎と先祖ハひとつ家系よて北條時頼のとき名を

六 願せし常世の子孫と聞えたり然るに今の源五左衛門も武藝手練の者あるは足利の武威おと
ろへて諸國に合戦やむ時あく人を庸ふる最中あれは田舎に埋もれ居らんより諸國と経歴で
其主どりを爲すやとのと且暮ころに思へども妻は近年没故てひとり子なりける次郎太郎
むづかに六歳ありければ今更に羈絆とありて所思を遂るよし無かりしを如何にせばやと思
ひ難て渡六に譚合しに渡六聞て一讀に及ばず足下の念願まことに所謂あり我等も富饒ちら
ぬ身の幼少むすめ三人あれは萬事に届かぬことあがら御子息をば我あづかりて兎も角もし
て成長させん疾々思ひたちたまへとて世に頼母しく答ひれしかば源五左衛門よろこびて些
少所持の田畑をば其儘我子の養育料にみち渡六にうち任せ茲年わづかに六歳ある次郎太郎
さへ預けおきて旅行の準備もいそいしく行方さためぬ萬里の空に心づよくも立出しの何
にか爲けん爾來の十年あまりと過るまで絶て音信なかりけり

第二回 伊勢新九郎神の示現を蒙る事

話説佐野源五左衛門が大和を尋足したる年より十年あまりを経るは茲に當時京家の武士に
伊勢新九郎平の長氏といふ壯士あり武藝軍學世に優れて智慧ふかく度量ひろく一器量ある
ものなりければ獨つらく惟ひみるに足利の武威おとろへて都も野邊にことならず虚々此
所に在らんより東國へおもひきて小城ひとつも攻取らばそれより次第に地を開く武運の時
によるべきものをと只管おもひ起せしかば竊に東國へ降りつゝ伊豆のくにまで來にければ
三島の神社へ參詣しつゝ武運の祈念に身をなげうちて丹誠をこらしたる其夜不思議の示現
と蒙りこれよりして幾何も無く名を關東にひろひせし長氏入道早雲のこれ新九郎はことあ

りけり抑そも伊豆國加茂郡にたゝせたまふ三島大明神の祭るところ大山すまれ命ありこ
の神崇順天皇の御宇に出現したまひ清和天皇の貞觀九年に從三位と授けたまふこと當國の
一の宮にて顯顯世々あ灼らしさるは茲に伊勢新九郎長氏のひとり内陣すすみ入りて暫時
拜きたてまつり我もし武運時と得て伊豆相摸の主ともあらば額破及及びしこの神社を造營
爲たてまつらん天晴わが身の久後を護らせたまへと祈念をこらしして「あれれとや三島の神
萬のみやばしらすこいよしもめぐり來よけり」といふ一首の古歌を幣として其終夜ののほ
ど又夢とも無く現どもも三島の神体長氏を枕のはどり現れたまひて手向の歌のおもし
ろければいでく返しを爲すべきぞとて「あがれ寄るその氷のみ白梅の香をこそむすべも
のいはぬとな」と詠じたまふ御聲よかどろき覺て四邊を見るにもものなし長氏奇異の思ひ
をあして示現の歌を考ふるよ何のととも心得がたきを猶さまぐ思へども解よしした
えて無かりけり折から通夜する人の有るよや廻廊の腰を掛てうち談らふ聲さこえしかば長
氏耳を敬て「我のみあらず夜とも籠りて斬る人あるのもし盜賊のいほらすやと心ひそ
め疑ひて足を爪立て外面いいで、動靜をうらひひけり〇されば又佐野源五左衛門時命の
仕官の望をやる方無さに先より大和と發足て西國四國を經たぐりつゝ其身の武藝をいひ立
て那首這首は大小名よ仕ざるよほらねども是どと思ぬ主君も無く宛行あひるゝ疎なども思
ぬひ似す多のらねバ心よ耻て故郷への一過も音信せず此所より一年彼所より二年流れわたり
よ押了はとも思はずも十餘年を経り我子もさこそ成長しつらめ渡六親子の恙もあさやと
七日來ころに懸れども身の落着て後よこそ鉢崎夫婦の思も應へて次郎太郎を迎へ取るべし

八

それまでいと只管志ざしを願まして又四國も脚をどいめず茲年の東國も赴き良き主と
りを爲ばやとて伊豆の國まで來よければ三島の社も立寄りて冀願を祈りたてまつらんとて
拜殿すすゝ入りつゝ暫時祈念を凝らすほどよとや日暮れて晴る夜のいさよふ月影鮮明
なきに宵の此所も通夜せんとして拜殿の廻廊に臂打のけて唯ひとり隈なき月とさめ居た
るも後れて來ぬる一個の旅人これも亦諸國と武者修行すと覺しきの拜殿より伏拜みて又廻
廊に臂をうち掛け源五左衛門を見返りて仮染にもいひ被けしより迭の上を問ひ問ひれて
最と隔意なく談話しに後より詣來し件の武士の北國の浪人にて蟻竹主馬之進惟政といふも
のあり是も諸國を經めぐりて仕官に望をありといへども往くさささよて用ゐられねば武
者修行するといへり是よりたがひに武藝を論じて興に入りたる自負高慢各自まけじ魂ひよ
腕を摩りて角芽立つ言語もとてしあらざれば所詮論の無益奇り此所にて眞劍の勝負してこ
と甲乙と決ひべけれど身を起すをりしも晴れるる月影の外に人なき神籬の武運を試すに究
竟どとて足場とえらみ前み向ひてヤツと被けたる聲を合圖に晃りと引抽く氷の刃丁々との
しと闘ふたる迭の太刀筋秘術をつくして劣ら老優すいどと合図現目覺ましき形状は垣間
見したる長氏の雲時見惚て在りけるか忽地思ひよしや有りけんヤヨ待たたまへ各々と呼止
めあひら衝と出たる歩も止めず廻廊より疾くも閃りと飛下りて打合したる白刃のゆひへ
風呂敷包を投掛けその身と壓ふ雙方をとり止れたる早速の拵死此方の兩個の思はずも左
右の控平と小膝を衝さたて驚ろさあがら信と見て心得がたき此場の裁判をもく足下の何
所の人ぞと問ひれて長氏莞爾と打笑み此所も在りども告げざりければさぞ不審く思われん

九

我儕ことい京家の浪人伊勢新九郎長氏と呼べる者宿望のむね有るをもて單身東國へ下り
つゝ此神社も通夜まうで甲夜より彼所に坐を下て内陣よりしりしり各々物たりを詳悉
あ聞しれとあらず武藝はほど垣間見て殆んど感心いたしり就も武藝に達人なきどもそ
の唯士卒れ勇として大將の業もあら老兵の英雄に心を攪ると孫子もいへるにあらせや猶
談合へ事もゆるに先それ白刃を納めさへと喩を言葉に花ゆり實ゆり凡庸あらせ見えし
り源五左衛門主馬之進のいよく驚ろそと理も服して聽て白刃を納めつゝ姓名古郷を説
明して又夜もとら兵法武藝を論じて興を催しける當時長氏左右を顧見各位も我も等く
志望ゆる修業の身なるに圖らずも此神前もて名告ゆひしり不測の縁なり所詮これ三人中
誰も有れ逸早く一城の主なら残る二人の其所も集ひて腹心の家臣となるべし斯の義
の甚麼と誠實も問ひれて兩人一儀におよばず夫のおもろしき契約あり後日背くもれあら
は當社三島の神罰をのうひるべしと誓しり長氏胸のく歡喜て社頭は吳竹さりとて其一
節を三筒お割て分ちて後の割符としつ猶再會の契るほどよとや天明は空のいろ森樹を離る
鳥の聲も三人の社を立出て思ひくは別けり〇爰も又大和國三輪は崎ある渡六の先年佐
木野源五左衛門が一子次郎太郎を預りて兵法武藝何くれとなく我子の如く教訓しに其器量
るものなりければ大方あらず上達してとや年頃にありしる元服させて幼名の次郎太郎の
次郎をとり即ち佐野次郎左衛門常命とぞ名告せける然るに鉢崎渡六の近年大和に合戦の暫
時も息時なく兵火の爲に家を焼られ田畑も荒て詮方なき民に歎きい我れみならぬと免ても
角ても此土地に住果べくもあらざれば何卒便宜に里と索ねて住居と轉んと思案をせしに當

十時伊勢は國司なる北畠は領分には些れ由緒は存るにより茲年孰れも二八の春ある三人は嬬

兒いさらあり妻は深雪と次郎左衛門をも同伴で遙々伊勢へ赴きつゝ安濃津は片はどりに家

を求めて住居し彼れ金創は舊疵の動もすれは起ることあり茲年の別て大和より移徒は疲

れにや百日あまり病臥ていと苦しげに見ゆれば次郎左衛門の思人は病氣平癒は祈念の

め且此十年あまり唯一通も音信なき實父は安否と知らず欲しさに渡六夫婦に事情を告て

天神宮へ参りつゝ二具浦に盤垢離とりて凡三七二十一日山田は宮に幣を手向て籠居と祈念

とてしけり〇されは當時阿漕はどりに佐野源東吾常景といふ壯士あり彼れも京家の浪

入にて源五左衛門の兄れ子あれは次郎左衛門の父方は從兄弟同士のありながら生國お

ちじらされは疎々しく遇せしに源東吾の兩親は四五年前に没故しより源東吾は早晩

となく身を放蕩にもち崩しと遂に都と立去りつゝ北畠の家中をたよりて人に寄食く居たり

しに圖らずも家系ひとしは鉢崎渡六親子と俱に從兄弟なりける次郎左衛門も津の町に來て

移りすめは寄邊にせんと毎日くは渡六の病氣舞にかこつけて問音づれ遊びとてろに爲

るはどに辨佐利口の癖者なれば三人の處女に想ひを懸けて孰れをなと心に選ひに元來三

子のことされは瓜と割すとのまゝある容顏の美しさも劣り優りの無ければも姉嬢女の若

梅の間へと答へも山吹のとあいろ衣くちあしよて啞されは望まのあし二番目の姫松は些仇

めいたるところあり三番目の小櫻のおむくあれは面白味の無きさまあれは何所やらに愛敬

ありて可愛らし斯在は姫松小櫻の二個の中を手に入きて熟しらへて後こそ親よいのせ

てぬくくと堪よあふんと竊に計較目れ關を忍びくよ目交て知らせ袖襟を引つゝ私よ

一十 木鉢 麴者 長 而 萬 姫

挑めども姫松も小櫻も心正しき處女あれは争でか仇ある戀を爲べき早晩も強面く恥しめて
從ふ氣色あかりしおの心短かき源東吾その度々恥しめられこゝろに怒り憤はり又つゝ
くと思はやう姫松も小櫻奴も生嬢女らしくい見ゆれとも酔でも酒でも興きぬ奴あり又兩
親に謎をかけたも垢あせにせん氣色い見えず氣色よそ疎まれて人よ寄食て此地に在りと
ももつれ上る便もなし行懸の駄賃より兩人の處女を搔擗ひて船路と東國へ馳りるは賣却
して熱腸を冷る骨折代ひきつとあるべし是に優る思案の有らと地質といだも悪だくま
を肚裏に納めて其後いあるは又油断をさせん爲は渡六の宿所に往きては行義正しくかりそめ
にも浮きさることを絶ていとす傍に人れ無きをりにに姫松小櫻に打對ひて嚮日に偶せし
迷ひよて狼りがましき氣色を見せしを左こる蕙如さまひけめ彼言の一時の戯れありなら
す心よ懸たまふなど信實しやかに詫しるは姫松も小櫻も欺あると知り知らずして然も有る
べしと思ひけり斯て又源東吾の阿漕より海船の飛來ををる二個の兇者鉦市悲八といふ
水士ども機密を告げて船路の準備を謀合せて折をまちしよ此時までも次郎左衛門の参宮
よりいま歸らず深雪の良人渡六が看病よいとま無ければ三人の娘女はどり近き普門院
の觀世音へ参詣して父の平癒を祈るはどに一日朝より入替り立替り人の來て姫松も小櫻
も暫時のいとま無かりしおのば觀世音へいま参らす若梅の啞されは有驚く客の應待あどお
の用立ことも無きものあり我の一人参らんと思ふよとろを手品よ知らせて其夕暮に唯ひ
どり御寺と投て行くはどは豫て伺ふ源東吾晝間見てだにも見分のささまで寸分違はぬ姉妹
あるよ況てや日影入として誰彼時のことなれば啞娘女の若梅を小櫻ありと見違ふて謀し合

せし恙八等に早く合圖を倣たりしかば二個の兇者心得て往來さえる木の蔭に待伏しつゝ、若梅を捕へて毫ども動かせず若梅いさく驚き怖れて聲を立んにも啞れ悲しき啞々とバのりに叫ぶる口に食する猿鯨準備の荷行李に押入て蓋もまつかと被けさる荒縄肩に打懸け輕々と濱邊をさして走りゆく源東吾の遠外に見送りあがら打はく笑みまづ小櫻めの手に入たりとてものことに姫松をも飽くこと知らぬ不敵の忿心拔身の一人どつて返して渡六の宿の庭口より家内の容子を伺ふはどに在りつる客の次第に歸りてとや初夜近くなる頃より家内俄然に騒ぎさちて若梅がまだ歸らざとて深雪小櫻もつどもに幾遍とさく戶外に立て今や歸ると待たぬれども有繋の夜間れことなれば遠くも出ず膽めて居り源東吾の小櫻を打懸はんと思へども母親深雪の傍に在れば詮方の無きのみからず姫松ありと見違へて彼の兇者等にさらはせしハ啞れ若梅あるよしを初て知りて竊に驚き悔しく思へど今さらには倣直あらぬ計略の相違ゆされて木蔭にさゝせむ折から佐野次郎左衛門常命の參宮は通夜よりも昨日までにて明しかば今朝の山田を發出て日暮て歸り來にければ絆れ仔細を聞てそのまゝ草鞋も解かずとつて返して普門院に走りゆき猶那首這首と若梅を索ねにられ得逢とすどて徒爾に歸りきて先渡六が安否をたづねさて若梅がことの仔細を深雪小櫻に尋ぬるに思ひほたりしことも有らば元來啞のことなれば密夫なまめし合せて逃かくれしに得もあらじ神隠しなどいふものに誘引れしにほらざるや然すの不具を其身を恨みて浦水層とありしかどて歎くをいとい慰めぬし次郎左衛門の頭をうたひけ我儕甲夜も歸りくる時如此くは浦輪よてそれ様子怪しき船人の耳語合て一箇の荷行李を船底へ隠し積たるを月明りよて

見てければ道は盜賊のとしけもれの何れ好らぬ業と爲ともれ等あらんと思ひしるをも身に關のらぬ事なれば其まゝ見捨て行過しが今さう思へば若梅をせしと啞と知らで兇者輩が船路より以て走りしうといふふ深雪と小櫻の歎きされりすく線返を涙よむせひて伏沈め渡六も我子の行衛を思ひぬたる心のなましと交へし病氣の床も氣ともをゆげて惱みけりさるやと源東吾の計較そでに間違ければ心慌忙て件の浦里へ走りゆきて那首這首と恙八等を索ぬるに彼等の追風の好きまゝに源東吾を待たずして其まゝ船を出せしハ源東吾はいよいよ呆れて吐れ裡に思案となると彼の恙八鏝市等の啞と知らで若梅を奪ふて船路を走るとも錢はあらぬ不具人を背負こたるとなれば反て我を恨むべし然らんには彼の兩人が夫を遣恨し歸りきて夥計の者も告んに蟻の塔より土堤崩れて我が計較を渡六夫婦次郎左衛門も等も知られるハ絆れ大事もあどもやせんまなよく此處を立去りて渠奴等も鼻とありせんものと思ひにければ然りけあく其あ々の旦渡六が宿所も往死て病氣を問ぬに神あつぬ身の渡六親子次郎左衛門等の若梅を撮さらさし本人を源東吾あるべしとい夢にも思ひくたざれば有りつるまゝに告知らせて商議合手よせられしハ源東吾うち聞て驚き呆れし体よもてあし言詞たくみに種々ど渡六夫婦を慰めつゝ次郎左衛門と手分して表面ばかりの若梅の行方と索ねて其次の日も渡六夫婦も別れを告げて我等ちとの所縁も憑て發迹のくちもいへば渡六に東國へおもひくなり舊き一家の縁といひ日來の思義もいへば彼地に在りても心懸て若梅の行方を索ねん各位あはも氣を永く伯父御の看病したまへと信實しやのに口誼と陳て名残をしげに唯一人何地ともなく立去りたり

爰に又伊勢新九郎長氏の嚮ふ三島神社よて佐野源五左衛門時命蟻竹主馬之進惟政等も別れてより伊豆相摸の國々を渡るかた無く經めぐりて地の理を考へ要害を見極め城主の強弱政事の得失まで密に探り知るといへども我身一箇のことあるに手をくださばさ由もあし然れどて爲差ことなき家仕へて他人の下風に立んこと今さら願ふしからず駿河國主今川家の此の由猶あるを以て又駿河まで立歸り今川氏も身と寄せつゝ客分の様にして時に至ると待はば人に忘れんことを恐れて苟且も才智をあらとさす元來人に傷れたる志ざしあるを以て川狩あかこつて毎夜毎夜打網を引下げ阿部川に沂のぼりての鮎をどり又ある時三俣の崎興津の浦の遠さを厭はず唯獵漁をたのしみに月日を送るに似たれども心の中に海川の淺瀬と豫て見極めて隣國の敵の寄せ來るときに先駆して諸人お目を覺させんと思へども人を知ること容易からねば國主の無用の人として用うる氣色無かりしかば長氏深く嘆息しつゝ猶川獵をこととして一日江尻のあきたある細井の浦におもひきて其の夕暮より網を下しつ夜もすべら彼所是所と一人漁獵明せむもその夜の獲物まれにしてとや明方にありにけり斯在とろに最と怪しげある船人兩人帆をわけ楫をわやつりて船を細井の松原のはどり近く乗りつけて密めささむら一箇の荷行李ととや磯むたへ昇扛たるその緯のていたらく故ありぬべく見えしかば長氏私にいふかりて渠奴らと必ず海賊あらん盗み來つるの何にかあらん熱く見さだめて後にこそと思へば少許退きさて松の木蔭に躲るひて雲時動靜をうかいひけりさるはどに兇者志入鰐市等の源東吾を待たせして引摺ひたる若梅を荷

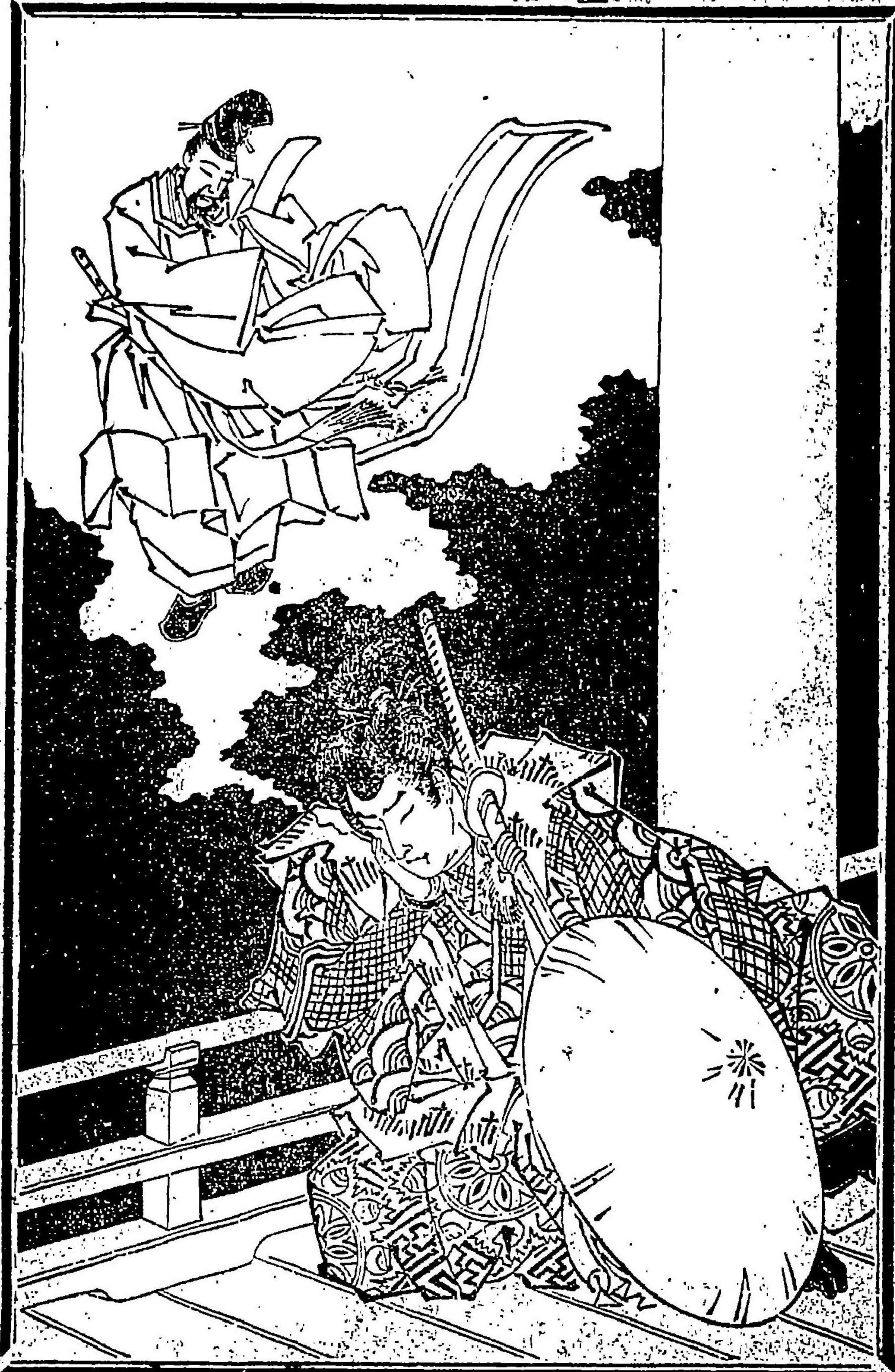
行李を打入れ船に乗せその甲夜の間の追風あまかして阿漕の浦を乗出し只管漕走らせしかば瞬息ひまに幾十里の灘をあんなく乗りつけてその明方お駿河ある細井の浦も漕着たり斯て志入鰐市のとやくも船を水涯ある磯別松に繋ぎとめく荷行李を陸におしあげつゝ先づ品物とど忙がひしく被けたる荒繩ひき解きて蓋かいたれば無慙や若梅のいのいのと口は猿鏝かゝる難義の網の魚籠中の鳥に異ありで勾引れ來つる夜の磯此所の何地の浦をともこと問ふよしもさまたの間は猶しも念する觀世音我身の厄難脱かれず父の病氣を救ふてせたまへと祈るに甲斐なき二人の凶者とや立かゝりて若梅を引立てもかんと爲るほどに長氏容子を見すまして疾さも憎しと木蔭より走りいでつゝ双方の肩先つかんで引戻せば驚きあがら怯まぬ凶者兩人一齊く見かへりて鳥さき島と思ひしに天明まどひの磯鳥一口のせろといふことか障碍するかと振とらふ小腕とつて冷むらひ性命知らずの盜賊ども暗きところ神佛あり明るきところに王法あり他人の婦女を搔さらひ船路を來つる不敵の曲者誰か見つゝ脱すべきといふせも敢ず志入びた市夫知られて後日のさまたげたんで仕舞と振さつて握り固めし拳の稲妻撃たんとするを長氏の身と沈まして彼首是首とやり違としたる早速の擗了よろめくところを抜打に水も溜らず鉦市を海へさんぶと切込めば驚き怖るゝ志入の肩先丁と所つくる淺疵あれども勇士の太刀風よけ果つ可くもわらさればそのまゝ海へ飛入りて生死へ知らずありにけり長氏の然もこそと刀と納めて若梅が猿ぐつを解き勳指して其の國所とことの様子を最とねんころに尋ねれども物い得いとす打泣の涙のひまに指さして手直似て答ふるその形状またく匿と見えしかば長氏忽然ころに悟りて今圖らず

もの語の新任女子と教ふこと大方ありぬ因縁ならん然ればこそあれ過しころ三島の神の示現の歌「流れよるこの水上のまら梅の香をこそ結ぶものいづぬ花」とありしは是の女子のことなるべし因て今歌のころを案ずるに物を得いはぬ此女子の生れつきたる所を病氣の重さの然らば深き譯あることにやあらん試して見んと心に感じて其ま宿所を誘引つ、今川家の人々に都なる従弟女の寄方なきの案ねきたれば遂も遣られず下女ぐりにして仕ふありといひこしらへて日を経るまゝに若梅の物こそ語ね立居勳侍のひしく好く長氏の心を知りて殊に伶俐見えたるに容顔の比類まれある世に美しき處女あれば長氏の獨寐のつれづれなるに堪へざりけん早晩とあき妻として妹背の契り淺からぬを人とな冷み笑ひつゝ假令標致の好もくあれ啞を愛して妻と做つるい世もそげたる物好かなど云のぬものなん無ありける斯てはや一年あまり経るはどよ此時鎌倉の管領持氏卿謀叛によりて敢なくも亡び失せたまひしかば京都將軍の沙汰として義政公の御舎弟左兵衛督政知とやせしを關東管領として伊豆の國堀越の城に居おかれしに政知にいかに逝去したまひし子の幼稚のりけり長氏この便宜をもて先づ堀越の御所を襲ふて伊豆の國を取らばやと心のうちに思ふのみ身は従ふ兵卒なけれは思ひあからし黙止つゝ獨嘆息したりける良人の心を汲としりてや間近く若梅すゝみ寄りて我夫さのみ問へたまふな御のぞきの叶ひ難きを妾の推しはべりといふ思ひがけ無きことなれば長氏おどろき怪しみて初めて逢見しその時より今日まで物を言ひざりし御身の言詞の不審さよ舊き病病の愈たるか作り啞か這いゝ甚麼よと問これ若梅さればとよ夫婦の縁にし神々の結ばせたまふといふされば物言ひざり

しと厭のまに情をかけて妹と背の契りを結ばせたまひぬる其よろこびを口づら語られぬ不具も時期ありて初めて言詞を交すこと我身あがらに怪しくはべり妾が古郷の大和ある佐野わたりで待りしに箇様くのことにより伊勢の安濃津より移り住む親の鉢崎渡六とて舊の京都の浪人なり母の深雪と呼べられたる妾と妹二人あり我名の若梅次を姫松するを小櫻とて同じ月日に産れたる三子ではべれば面影の別なきまで似たれども妾の宿世あしくして幼稚かりし頃よりも物の言ひれぬ病氣あり此もゑにこそ両親の神は佛にいのりつゝ良薬を索めたまひしかども兎毛ばかりの効験もなく憂き年月を過せしに年齢十五といふ春のころ日來信ぞる觀世音夢まくらに立たせたまひて汝の病氣の過世の劫なり然れども深く祈りて物言とること有らば英雄の妻とありて富貴の其身にあまれども壽命の必ら老短かるべし又物言とであるあらば身は幸福の無けれども九十餘歳の壽命を保たん此の二ツのうち孰れどか願ひしく思ふぞと正しく問ひせたまひしかば夢をゝるに申すやう假令性命の短くとも人あまゝの身とありて名だゝる武士と配耦の何の恨とのはべるべき大慈大悲の觀世音一日なりとも人並に物言ひせてたび給へと伏をのむつゝ答へ申せしに菩薩いさこそと點頭たまひて御手に持たせたまひたる横笛を取直して投與へたまひしを取らんと爲せしに其笛の膝のほとりへころくと轉びし様よてかいくれ見え道は什麼いかにとばかりに周章ふたのち搔さぐり索ねんとせし時夢の果敢なく覺るべりさ不思議の示現と思ひしに空だのめにてあるし無ければ親にも告げず勿体なくも佛を恨たてまつりしに其次は年父の大病箇様くの事により近きはとりの觀世音へ參詣て歸さの誰彼時顔も見知らせ名も知らぬ

兇者等に跟られて手込になりし船路より駿河の磯に漕着けられて圖らむ御身に救われし情
 の途に縁にしとありて妻と呼ばる、此身の幸福最とよろこばしく思ふにも人並あらぬ事を
 の世に羞かしく思ひしに昨夜ふた、ひ見し夢も去年の示現も觀世音菩薩の授けたまひし
 彼の横笛を拾ひとりつ、懐中へ納ると思へば夢さめたり夫より今朝の常もままして最と心
 地よく覺えしが今圖らずも思ひし事と語へば言ひる、我身の歡喜示現たがひぬ御佛の利益
 にこそと感涙と袖にうけつ、詳細に一伍一什を物語れば長氏まさりに感歎して我も亦過ぎ
 しころ三島の神の示現あり箇様くの歌により御身の難義を救ひしとき思ひ會せて情と被
 け不具ありしを厭はずに妻と爲つる、其も名なり然ればこそわれ神佛の恵にもれず今日よ
 りして物言ふこと不思議あれ御身が心の伶俐さよしの日來よりして我よく知れり然るに今
 又我が心に思ひし事を推せしならば先づ試みに打出して如此くと語ひたまへ中らば意見
 に隨ふべしと云ひれて若梅打は笑と御身の私に堀越の城を襲ふて攻落し伊豆の國を手に
 入れんと心に思ひたまへども援の兵士たえて無ければ黙止たまふに侍らずや妾の女子の猿
 智恵もて助言の鳥手れ所爲なれども箇様くに謀りたまひ、五百人の軍兵の容易く御手に
 屬く可きものをと手に取る如く私語さしめせば長氏深く感心して頼て其計略にまたがひ大
 の日國主今川殿に見參して近來當國の山々に山賊隠れすひと聞けり若我等に四五百人の軍
 兵を貸し、まひ、獸狩に言託て山賊の根を絶すべし此義と許容させたまへうしと信實しや
 かに聞えちぐれば今川殿おとろきて我が領分に山賊の隠れすひとの有らむ開の安からぬ
 辨ありしとさるを早くも聞つけて退治せんと申すこと實にもつて神妙あり疾く、準備を

致せとて速雄の兵士と運みて都合四百餘人列卒の如くに打拵たせて長氏に授けにければ長
 氏これを率へて駿河の山にの赴かず伊豆をさして急ぐにぞ兵士等のみを怪しみて其所以を
 尋ぬるに長氏答へてさればとよ我が志す得物の駿河にあらす只堀越の城に在り前めや前め
 と下知しつ、短兵急に取詰てとや堀越の城の大手を打破りつ、攻入りたり城中に思ひかけ
 なき俄然の寄手に驚き騒ぎて討たる、者少あり、殊更政知逝去の折にて家督の公達幼稚
 ければ皆たよかいんと爲る擬勢も無く公達女性を守護しつ、都をさしてぞ落たりける已に
 して長氏の堀越の城を乗取たる此勢ひを振るとて韭山の城に押寄て其所とも容易く攻落す
 勢ひ破竹に異らぬ、蟻竹主馬之進を初めとして近國に武士走集まりて三千餘騎にありしり
 べ長氏、今川より借うけたる四百餘人、引出物を數多とらせ蟻竹主馬之進を使者として駿
 河へ還しつ、ついに長氏不肖なりといへども國主の助をうりひりて伊豆の國と攻取りたり
 此後とてもや合せて随分とたらし申すべしと口上を語いせにければ今川殿おどろきて然て
 の旨くも長氏に出しぬかれたる愚さよと後悔臍をかひまで口惜く思へども已に威勢着た
 るを憤怒にまかせて恨をむすば、毛を吹き疵をもとひるあらんと思ひかへして異議もなく
 長氏の妻若梅を主馬之進に交付しつ、伊豆の國へぞ遣しける斯在しかば長氏、此度不思議
 の戦を興して伊豆の國を討取し、總て吾妻わか梅の計略によればとて第一の効と定めて山
 梶御前と稱へ、大方なうを待遇する今若梅を改めて山梶と名付られし、三島の神の示現
 の歌を思ひ寄せての事なるべし然れば先づ伊勢の安濃の津へ人を遣ひして山梶御前の御姉
 妹を迎へとらんと議せらる、に山梶御前こそを禁めて妾の人に勾引されて彼地を出し其頃



二、親渡六の最重き病氣の床に臥したれば親の事妹のこころ一日も思ひぬ時あければ開の身一個の事にはべり君いま漸に隨從ふたる軍兵に給ふべき恩賞を後よして妾の事を急がせたまひい人みあ恨みとひくべし先づ恩賞を行ひたまひて打取たまひし國郡のよく治りて後にこそ御恩あつかり侍るべけれど忍びやかかみ諫めたまへば長氏ますく感心ありて軍兵の賞罰を取りいそぎ給ぬばに其後の是彼と合戦にのみ間暇あきに數多の敵地と打越えて伊勢まで迎へを遣すの容易さ見ざらざれば心ともあく黙止つゝ月日を過したまひけり叔父佐野源五左衛門時命の去しころ長氏と三島の社にて別れしより武藏の方へ立越えて一兩年を過せしに爲出したる事も無ければ又中國まで引かへして尾張より伊勢路におもひさ太神宮へ參詣して武運を祈りたてまつる折から伊豆の風聞きこえて伊勢新九郎長氏堀越山二箇所の城を短兵急に攻落して伊豆の國を打從へたる事のおもひさ如此々々と己に隠れ無かりしかば時命おどろき且歡喜てされば彼の人の世の英雄ぞと思ひしに果して斯る大義を興せり我が主君と憑ひとも毫か不足あるべからず約束の事あれば是より伊豆へ赴ひくべきか大和の佐野へ立越えて渡六夫婦と事由と告げ我子次郎太郎を誘引て長氏殿へ參らんかど心の中よ決め難ねて遂に下向お赴きつゝ津の町を過るとさ圖らずも渡六の門邊よ出しよ面を會せて這いゝ甚麼とばかりは誘引之れつゝ家よ入れば深雪を待たせ次郎左衛門の父時命の恙なく來つると聞て轉ぶが如く走り出でつゝ手を把て歡喜涙お喚ぶの幼稚とさよ別れしりの親子送見忘れても心い忘れぬ双方の喜悅深雪の二人は嬢女とも種々よ待過よと源五左衛門時命の志ざしを得さりける十年の旅寐よ身と慚て年來我子と養育は謝禮

を述べ恩を感じて有りつる事を物語り箇様くの約束われれば是より伊豆へ赴きて長氏殿に奉仕んと心ごまへを致せしかば大和へ往きて各々方告知させばやと思ひしに此所にて會し不思議の再會いつれ程に此所より移りすみまひしを問ひて渡六秘ひ由なく兵亂と避けん爲に嚮に大和を去りしこと此地へ移りて程も無く大病にをカされし其折柄は啞嬢女の若梅の居らざりて今に行方も知れざるよしを頼の箇様くあり末の箇様くぞとて渡六の近きころより病氣やうやく愈りて一二里の道路ればはは出歩行を爲ることまで深雪と共に代るくに絆遣も告しおのバ時命の若梅が失ふしことを打敷きて暫時言詞も無かりしと思ひ返して形を改め若梅どのの不仕合の悔みあげくも今さら甲斐なし見れば二人の嬢御もとや年をろみ成りさまへり孰にまれ二人一人を我子の嫁に給ひれかし我等親子伊豆に赴き人並ある身となるあかば各位をみお迎へとりて此年來の御恩に酬へん此義の如何と信實に説かけられて渡六夫婦の喜ぶこと大方あらず開の豫てより我々も然せんどこそ思ひしあれ佐野鉢崎の親類なるも今又子等の縁と結ばよこれに慶ぶる歡喜あし圖取にして定めさまへといふに絆とや整へば二人の嬢女の名を書付て次郎左衛門に抽せしに二番嬢女の姫松の名を記せしに引當たり是により姫松を次郎左衛門の妻と定めて此事變改せざらん爲に手形の証文を取換へして蓋さを取結ばせよな悦びを竭せしめども臥床と共あする暇なく源五左衛門時命の心しきり急がひしけれ程あく迎ひと遣すべしと渡六夫婦を慰めつと次郎左衛門をも誘引ふて其正午發足は慌忙しく伊豆と投てぞ立出ける○斯て又一年あまりを過せども伊豆より迎ひの人も來ず風の便りも無かりしは渡六甚く待ちびて源五左

衛門親子の方より今日まで絶て音信なき如何よししても覺束なし我が病氣の大方愈て立走行も自由あれバ我自身彼の地へ往きて姫松を手交付せん然バとて旅行の準備をどくの深雪小櫻に留守を委ねて津れ宿所は残りし留め深雪等の免や角と諫むると聽かずして姫松を携へつゝ東を投て赴くはほど三河遠江のさかひなる一黒山の邊りまで來よけるとき渡六俄然は悪病發りて心地死ぬべく見えしかば姫松驚き悲み憂ひて種々勸れども毫の毫も無ありしかば泣々薬を求めん爲に後のあげさの白須賀の驛路さして急ぎゆく親子一世の別れとい後よぞ思ひ知られけれ

第四回

伊勢新九郎若梅と妻となす事

爰に又佐野源東吾常景い去るころ伊勢の津よて爲せし悪事の齟齬て兎者銚市志八等又啞嬢女の若梅を搔擾のせし其跡よて彼等が口より萬一事の發露るべきかと護影ださ身ありつぎに假托てはやくも伊勢を立退りつゝ三河の國よ赴きて矢矧の橋のほとりなる所縁の家よ身を寄せつゝ爲こともあく月日を送るよ又かの兎者銚市の駿河の細井の浦輪よて長氏よさきり倒されて水底ぬかく沈とし急所の深疵ありけれバ魚籠の腹よや葬ひられけん死骸も浮のすありしを志八の淺傷あるに元來水主のことなれば水練の達者よて浪の底を潜りつゝ辛くも彼所を逃去りて是もまた三河なる豊橋のあたり脚をどいめて雇水主して居るはどに一日てかりも源東吾と集群の里にて會合たり是のくどバかり送に疵もつ脚あれバ疑ひあふて白氣しが志八の只管は恨みられじと心得て面目なげに頭と搔き悪いことい爲まいもの先頃伊勢の阿漕よて阿兄其方を待さきて銚市めに勤められ追風にまかして駿河ある



四十二

細井の浦へ漕着しに筒様くゝの事により夜網を下す武士に見とゞめられて打合しに銚市め
 いさゝ一刀にさりたふされて荒浪の底の水屑となりふり我等も眉間へ一太刃めてられ其
 儘海へ飛入りて漸々いに逃課せしゝ彼の品物の如何にかなりけん武士めよ好きことを爲
 られたりさん其後の竟に見るけた事もあしと啣言がましく打詫れバ源東吾の心おかしく扱
 い啞の若梅ありしを渠奴の知らで在りけるよと思へバ故とさしなめて好い加減あことと語
 ふものかな發端親の我をまいて然ぞ好いことと爲たで在らう分前とたせと手を出せば志八
 まさりに頭と搔きて其疑念の道理おれを大誓文虚言であい頼の疵がたしかお証據その代り
 にい此後にまうけ口が有るあふバ骨ツさり働いて先度の損ハ屹度うめます久しぶりだに宿
 の酒店で一盃飲ふと機嫌とどりつゝ打連立て行くはきに潮見坂のはどりにて圖らずも鉢崎
 渡六の娘女姫松を誘引ふたる旅行の疲れは病臥せしを姫松の涙あがらに種々いふるを
 源東吾のいち早く述べ打見てはじめの驚き後より悪心ふたゝび發りて行も得やらず志八の
 袖と引つゝ木蔭よ退ぞき猶も動靜と伺ふほどは姫松の親の急病をみとりかねつゝ白須賀ま
 で往きて薬を買ひもて來んとて覺束なくも病臥せし親をのこして急のいしく驛路さしてぞ
 走りゆくこそ空竟と源東吾の志八は耳語て計各の如此ぐなり面を知られし我をさば此幕
 よい出られず竹輿の雇ふて宿にて待たんと利主はたらけ合点のど吹又し毒氣よ志八の旨い
 くと小點頭裾引からけて姫松の眼を尾ふて追ふてゆく程は姫松の父の病を救へせ
 たまへと心の中に在と有る神佛を念じつゝ投て行方ハ白須賀の宿と聞しを心あてよ急ぐと
 すれは果敢とらぬ女子の途の疲れ脚やゝ十四五町もくはきに日景のたひく西の空もりの鳥

ののいゝと繁鳴るゑも氣よかより立留りて物思ひ思ひ返して又さかんに走らんとすれば忽ち地に胸うち悸くもいぢらず前へ急げと後もまた案事に果しちる繩手打越ぬてや、白須賀の宿に入らんとなすはとに追蒐來つる兎者志八チ、イ〜と姫松を遙にまねき呼びよめて息吻さゆへず走り近付き痛ましや旅の女中潮見坂の松原に病臥したりし一人の旅人鉢崎渡六殿といはれし其嬢御に在らずや我等近所の里人なるが只今通行かゝりしに親御の己に斷末魔見るに得たへず立寄て種々に勸りしに息の下ある親御の頼と娘女姫松と呼ばるる者我等が藥と買ひもて來んとして白須賀の方へ行きたり假令くすりや飲めばとて助るべき病にあらき願ふの御身姫松を追蒐て呼戻してたまへかし言遣さんこと數多あり頼むくど苦しげに語るゝに氣もめいり果てア、氣の毒きことでの在る旅行の道連世の情こゝろ得ましたと受合て跡と慕ふて此所まで來たり斯いふ間にも心もときい足弱といひ草臥て道果敢ゆかぬ其程に親御がコロリと逝られたら悔んでも夫りや返さぬことア、前前から來る昇夫の恰好我等が知つた同士遠慮い無し乗らしやんせ一走りじやと馴々しく情を被けて小手招きサ、イ〜と呼ばくれバ源東吾が先へ廻つて私語しめして雇ひかきたる二人の雲助心得てとや空輿を昇寄すれば姫松の親渡六の病重りて取話しと聞くよりまそ〜と胸うち勸悸きみだ頻りにばふり落て思案及及ばず泣々も志八は打對ひて變る御世話となりませる御志ざしの嬉し〜といふ間も心急ぐま〜と草鞋とを捨て急ぐのしく其儘竹輿を乗り移れば垂を下して雨覆他見とさせぬも仕事の混騰サア近路を行らざる〜といひつゝ竹輿を昇扛させて宿の裏手の田圃みち潮見坂をバ後あして東を投て走りけり〇折ふし鎌倉にはと近き

化粧坂の傾城屋美しき賣子を買ひん爲よ源松まで來て逗留すと聞てゑしかバ源東吾の先へ廻りて彼の傾城屋と譚合つゝ當夜姫松が身代百兩を受取り己よしして姫松の欺かきし泣きつゝ通宵悔を泣明せとも誰とて救ふものも無く旅路の空に女子の悲しき途にはるる相摸なる化粧坂まで誘引はれて愛さ川竹の浪まくら流れの身とどなりにける然れば又伊豆の津ある渡六の宿所に、妻の深雪嬢女小櫻しばく留守を預りて東國の音信をまちける三四の月に及ぶと渡六の歸りこそ深雪母子の待りびて噂としつゝ日を送る此時諸國甚亂れて攻戦のぬぬも無ければ飛脚の便も自由ならず如何に〜と胸を痛めて半年あまりと送るはとに貯蓄もはや竭たり其時母子譚合して今日まで絶て一度も伊豆より音信の聞てぬい事故ありぬべきことにちん思ふに彼地に留められて住着たまひしことあるの然りとても如此〜と爲知て迎の人をだに遣したまひぬ事やいある兎にも角にも思ふのみにて胸安のふぬことなりし然のみならず煙の料も己にはや竭たるに何日まで此所に居つゝ待たんと煎じ詰て詮方なし難具のかざり賣却あして夫を路費に伊豆に赴き親子一所にあるべしとて俄に心忙しく然て旅行の準備とととのへ里人らに別を告げて小櫻もろとも遙々と伊豆をさしてぞ立出ける斯て深雪小櫻の夜にやどり日に歩行ゆ〜と三河遠江の境なる境川にはと近き繩手道を過るとも但見れば道の邊の田の畔に一枚の札と建て某の月某の日に箇様〜ある一個の旅人潮見坂の邊にて俄然に病氣に取詰られて其夜虚しくきりにたり因て土地の法にまかせて遺骸を葬り畢ぬ心あたりの人あらば村長方へ參らるべしとぞ書たりける其旅人の年齢のはと面体衣類の模様までよく渡六に似てけるに果敢きくありし月也日

も先日(さき)に安濃津(やすのつ)を首途(かみち)せしより此邊(こゝ)へ來(き)べき頃(ころ)あれは道(みち)のとも甚(いた)く摩(ま)と母娘(ははな)女胸(むね)うち騒(さわ)ぎ涙(なみだ)ぐみて近傍(よりの)の人に尋(たず)ねつゝ夫(おとこ)より徑(みち)に分入(わかれい)りて村長(むらぢ)の宿所(しゆくしょ)に赴(まゐ)り東國(とうこく)へ下(くだ)りて音信(おんじん)なき真(ま)人と慕(たづ)ふてはるゝと伊勢(いせ)より來(き)つるよしを告(つ)げ田(た)の畔(ほとり)に建(た)えられし札(ふだ)の文(ぶん)言(こと)にどやら心に懸(か)るこの侍(ざむらい)れは猶(なほ)詳細(しんじゆ)に其人(そのひと)の最期(さいご)のよしを問(と)ひんため尋(たず)ねて來(き)つる者(もの)ありと涙(なみだ)をらにいひ入(い)るれば村長(むらぢ)庄作(ぢやうさく)といふ者(もの)出迎(いであ)へて深雪(ふかゆき)母子(ぼし)の名(な)を尋(たず)ねなほ國所(くにどころ)と問(と)質(た)して打(うち)らなづきつゝ扱(あ)いふ様(よう)尋(たず)ねらるゝ彼の旅人(たびびと)の潮見坂(しほみざか)の邊(ほとり)にて行倒(ゆがた)きたりし時(とき)土地(とち)の者(もの)の報(うけ)知(し)よりて我等(われら)も其處(そのところ)も趣(おも)ひつゝ形(かたち)の如(ごと)くも剛(いた)りたれども大病(たいびやう)の事(こと)あれは鍼(はり)も藥(くすり)も効(き)顯(けん)あし同伴(どうはん)の娘女御(むすめのみ)の藥(くすり)を買(か)ひ白須賀(しろすか)まで行(い)きしといはれしを待(まち)てども歸(かへ)り來(き)ず病人(びやうじん)もろの事(こと)をのみ甚(いた)く苦勞(くろう)にせらるゝも追(お)ひ追(お)ひ人(ひと)を走(は)せしめて其娘女御(むすめのみ)と迎(むか)ひ遣(や)りしは行方(いりかた)の絶(た)えて知(し)れぬも道理(ことわり)白須賀(しろすか)のはどりにて兇者(いづもの)等(ら)が騙(だま)りて箇様(かやう)くゝいひ遣(し)へ雲助(くもすけ)竹籠(たけかご)は打乘(うちり)せて何所(いづところ)へ走(は)りしを借(た)か見(み)たるものありと其夕暮(そのゆぐ)も聞(き)えしかば勾引(かひひか)ききて賣(う)れやしけん親父(おや)の斯(か)る風聞(ふうぶん)を打聞(うちき)しより驚(おど)き歎(なげ)きて病氣(びやうき)のいよゝゝ重(おも)くありたり到底(とうてい)本復(ほんふく)し難(がた)しと自分(自分)覺悟(かくご)や做(し)たまひけん漸(や)やくよ身(み)を起(た)して只(ただ)一筆(ひととせ)を書(か)き遣(や)し幸便(さいべん)まつけて故郷(こきやう)へ是(こゝ)を届(と)けてたまひと最苦(さいく)しげは語(こと)はれたる夫(おとこ)が末期(まうご)の一句(ひとこと)もて終(つひ)空(くう)しくなりたりとあるべきよ非(あ)さまじく土地(とち)の法(はふ)は任(まか)せつゝ守(まも)り守(まも)りへたてまつり亡骸(なつか)をば我等(われら)が村(むら)なる菩提院(ぼだいゐん)へ葬(はな)りたり其入用(いりよう)を差引(さしひ)て盤纏(ばんぜん)の僅(ちよ)の残り(のこり)あり可哀(あはれ)な事(こと)といひ思(おも)へども亂(みだ)れたる世(よ)の習俗(じやくぶ)もて敵地(てきぢ)へ人(ひと)を遣(や)しつゝ所縁(ところゆかり)の人の伊勢(いせ)の津(つ)より素(す)ねて來(き)ますことともやと思(おも)ふばかりを便(たす)かして久(ひさ)しく札(ふだ)を出(だ)しおきたり渡六殿(わたむつだん)の妻子(つとねこ)とされば疑念(ぎねん)もあらず所縁(ところゆかり)の人(ひと)と思(おも)ふて斯(か)は申(まを)すあり是(こゝ)見(み)

さまへといひひめて納め置(な)たる渡六(わたむつ)が大小(おほいぢやう)の刀(た)を取(と)り出し又(また)旅行(たびり)行李(りやう)取(と)り出し其臨終(そのりんぢゆう)も書(か)き遣(や)せし筆(ふで)の跡(あと)さへ遺(な)りもあらず交付(た)せば深雪(ふかゆき)小櫻(こおう)の聞(き)くもつげ見るにつけて遣(や)るかたも無(な)き心の悲(かな)哀(あはれ)みだの雨(あめ)と降りそゞろ旅(たび)の宿(やど)りのもる時(とき)雨(あめ)共(とも)音(ね)あよゝと泣(な)れ沈(しづ)む聲(こゑ)をかざりの新傷(あらたな)悲(かな)歎(なげ)よそも聞(き)だよ哀(あはれ)れあり斯(か)く深雪(ふかゆき)小櫻(こおう)の漸(や)やくよ涙(なみだ)を禁(こ)めく諸共(もろとも)渡六(わたむつ)が遺(な)せし筆(ふで)の跡(あと)を見るは箇様(かやう)くゝの事(こと)より何者(なにもの)の所爲(ところゝ)といひ知(し)れぬと姫松(ひめまつ)を勾引(かひひか)きけん如此(ごと)くゝの風聞(ふうぶん)あり若(わか)梅(うめ)といひ姫松(ひめまつ)さへ行方(いりかた)も知(し)れぬなりし事(こと)過世(あきよ)の惡劫(あくごう)なりんのみ今(いま)もして悔(く)むも甲斐(かひ)なきしに深雪(ふかゆき)小櫻(こおう)の禁(こ)めしを聽(き)かずして病氣(びやうき)勝(か)る身(み)を願(ねが)見(み)せ戀(こ)ひ姫松(ひめまつ)を佐野氏(さのぢ)親子(おやこ)より手交(てか)付(た)せんといひ速(はや)りて旅行(たびり)も趣(おも)ひしは大方(おほい)からぬ我(われ)が過失(あやまち)すでも手形(てがた)の証文(しやうぶん)まで取(と)り替(か)へたる源五左衛門(げんござゑもん)親子(おやこ)の者(もの)も分疏(ぶんしゆ)無し我身(わがみ)このまゝ世(よ)を去(さ)りて便(たす)か身(み)とあるとても附客(つきやく)くゝとし伊豆(いず)へ趣(おも)ひ佐野氏(さのぢ)親子(おやこ)を寄(よ)せあは恥(は)の上(の上)の恥(は)あるべし伊勢(いせ)も遠(つひ)に住(す)むわびて寄邊(よきべ)なき身(み)とあるあらば下總(しもとすま)の國船橋(くにふねはし)なる鉢崎(はちさき)といふ里(さと)も趣(おも)ひ彼地(かのぢ)の大和(おほい)れ故郷(こきやう)もひとしく我(われ)が先祖(せんぞ)に由緒(ゆいぎ)の地(ぢ)あれば世時(よとけ)を忘(わす)れぬ人もあらんを便(たす)か細(こ)き煙(けむり)をたて免(ま)れ角(かく)もして一期(いちご)を過(す)せ最覺(さいかく)東(とう)なき事(こと)あは永(なが)き月日(つきひ)の其程(そのほど)も二人(ふたり)の娘女(むすめ)も環(めぐ)りあふ事(こと)もわらば千僧(せんそう)の共(とも)養(やしな)ふも優(やさ)す追善(おひぜん)ならん萬(ま)ん一(いつ)幸(さい)ひは姫松(ひめまつ)の身(み)をも汚(け)さず恙(や)なく母子(ぼし)會(あ)ふこと有りもせば其時(そのとき)伊豆(いず)へ誘引(いざな)ひて源五左衛門(げんござゑもん)次郎(ぢやうら)左衛門(ざゑもん)へ是(こゝ)等のよしを告(つ)よかしと書(か)き留(とど)めたる今果(いまは)の遺言(いごん)筆(ふで)の運びも異(こと)しき迄(まで)に日頃(ひごろ)に似合(にあ)ふるへ書(か)き苦痛(くるしみ)さこそと其折(そのせ)の心(こゝろ)の中(な)を量(はか)り涙(なみだ)ひまなき母娘女(ははな)のなげさの最(さい)と十寸(じゆ)穂(ほ)の薄(うす)まねり甲斐(かひ)なき魂(たま)よばひ伏(ふ)つ沈(しづ)みつ諸共(もろとも)に口説(くは)たてゝぞ歎(なげ)さける(物語二途(ものがたりふたぢ)も分(わか)る)去(さ)る程(ほど)に佐野源五左衛門(さのげんござゑもん)時命(ときのみこと)へ去(い)る年(とし)伊勢(いせ)の津(つ)まで鉢崎(はちさき)



渡六は還り會ひ次郎左衛門を誘引ふて伊豆の國へ趣きつゝ長氏に見參せしむるに長氏の源五
 左衛門が約束を違へずして父子もろ共速のよま走まわりしを賞させたまひて庄園一箇所を宛
 行はれ源五左衛門と物頭に於て主馬の進が次席に居らせ次郎左衛門を近習おして最懇懇
 まど仕はせりるされ源五左衛門の此頃年渡六が恩義のよしを主君長氏に聞こえ上げて姫
 松をむかへとり次郎左衛門と婚姻を取結ばせやと思ひしか共隨身の其頃より所々の戦ひ
 間暇みけき申出べき便宜もあく心ならずも然止つゝ數多の月日を過せよぞ長氏の又源
 五左衛門の渡六は所縁あるよしを聊かも知りたまふて山梶御前の爲のよを渡六夫婦と娘女
 共をむかへとりと思ひたまへき打續く合戦おその便宜と得ざりしかバ蟻竹佐野は老臣等
 よもまた其由を知らせたまはず斯て茲年の小田原ある大森實頼を討平けて小田原と居城と
 定め姓の平あるをもて往時鎌倉の北松九代の榮華に似らんとて伊勢氏を改めて北條を名乗
 たまへバ威勢關の東に赫々鎌倉ある兩管領も旗を巻よしをを通じて各自歸伏の氣色あり
 是等の歎喜のあらで去年の春彌生のころ山梶御前の御腹は若君誕生したまして氏千代丸
 とぞ稱けたまふ實は日出の大將なれば中國の歴々もあなぞり難くや思ひけん伊勢の國司の
 北畠もはるくと使者を以て伊豆相横の平均と祝して物と贈りたまへり長氏に此時機を得
 て伊勢路へ使を遣して渡六等に向へどとんとて一日佐野蟻竹の老黨を招きあつめて山梶御
 前の事のおもひを秘すはじめて告知せしめて鉢崎佐野の向ひの誰を伊勢へ遣すべきと打
 譚合たまふに源五左衛門時命の主君の奥方山梶御前の渡六が娘女若梅なりしを初めて知
 りて大に驚ろき且よろこんで前を出て伴の鉢崎渡六の最奮親類もて次郎左衛門の幼稚

ころより十年移まり渡六の養育の恩と受しこと簡様くと聞えあげて此度伊勢への御使に
 小臣父子は仰付たられ下さるべしと次郎左衛門は姫松を婚姻の約束せし其事までの披露
 よおよばず長等の由い渡六等の到着のうへ彼人より申さるとも晩さよあらず有繫主君
 の奥方の妹女を我が嫁はや約束を爲しあんど誇りごはに申さん事人の嫉みも護影しと
 思ひしゆゑふ言はざりけり長氏も亦佐野鉢崎の舊き一家の因縁ありて次郎左衛門が此年來
 彼所は在しことゆしを初めて聞かせ給ひつゝ其よろこび斜ならせ扱ひ汝達父子の者い我
 等と内縁ありしなり伊勢へ迎ひに遣とよい究竟の人ありとてそきはち源五左衛門に次郎左
 衛門を差添て伴の使と命せられ次の日初て山榎御前に見参の事をとりて御消息と種々の賜
 物を交付たまはり疾く發足いたすべしと仰出されたりければ源五左衛門次郎左衛門の數多
 の供人を引連て次日の朝未明に小田原を首途しつゝ伊勢路をさして急ぎけり〇斯て其頃氏
 千代丸の誕生日の祝壽あり茲年彌生の末のかた宮参りあるべしとて御母山榎御前諸共に三
 島の神社へ詣たまへば奥家老多保野番太夫と初めとして御供の男女百余人雜兵の數を知ら
 ず箱根のこたに旅館とまつらひ一夜此處に泊らせたまひて次の日三島に詣らせたまひ宮参
 り事畢りて己に下向におもひさ給ふよ此日の殊更長閑なれば一の平に御輿を立させて山榎
 御前の若君もろとも富士を眺めて余念なく興せさせたまふ折柄暴に暴たる負傷猪そのさま
 牛に等さる間近く走來るよぞ御供の壯年輩のいやどばかり驚さるゝ立て立塞り懸隔て、組
 止めんとせし者い牙は懸られて命を落し手鎗をもつて突ものい穂先折れて毫も徹らず野猪
 いますく狂ひに狂へば山榎御前も若君も己に危うく見えたまふ斯在どころに佐野源東吾

常景の曩日お志八とまめし合せて姫松を勾引しらの身代金をもつて衣服をどこのへ當時日
 の出の北條家へありつかんと思へども未だその便宜を得ず氏千代丸の宮参りを見物のため
 箱根も趣らざるも伴の野猪を刺して手柄を顯したる其事のあもひさの五回のはじめ見え
 えたり

第五回 渡六旅中病死の事

されば佐野源東吾の姫松を勾引して化粧坂へ賣しとさ自己の陰よりいとを引て姫松と面を
 合せず身賣のことの志八に計らひせたりけれども志八の先の年若梅を勾引せし割前の貸
 あればとて身代金の百兩いたし三十兩分與へて其他の自己のものとしつ如何にもして北條
 家へありつかばやと思ひしかば先づ身のまのりを造らへ飾りてその便宜を需めしに我身に
 舊き類親なる佐野源五左衛門父子の者い己は彼家仕へて出頭して在るよしを傳へさうて
 思ふやう我が伊勢の津に在りし時若梅と勾引せしも又近頃姫松をたばりて賣たる事も源
 五左衛門次郎左衛門等の夢も知るよし有ること無ければ伴の父子に譚合よりて我身の吹
 擧を頼まんとて竊し小田原も趣きて次郎左衛門等を索ねし小伴の父子の去る日又御使を承
 たまいりて伊勢へおもひきたるよしを爪は聞て望みし失ひ如何よせましと思ふはと長氏
 の若君氏千代丸御母山榎御前もろとも三島明神へ詣でたまふと風塵隠れあかりし源
 五左衛門次郎左衛門等二人に一人のはや立歸りて彼の宮参りの供に立こどもやあると思案
 を爲つゝ其行列を見物つてら跟につきつゝ三島におもひさ彼の同勢を彼是と索ねしかども
 次郎左衛門に似たる者だに無かりしかばいよく望を失ひて再び後を隨ひつゝ箱根へ歸り

来るほどに又彼の暴る負傷猪の數多の人を駈散らして頻に狂ひたりけれども有繫に多勢のことなれば手鎗をもつて突はばに野猪も再び數箇所の疵によろめきあがり猶倒れず氏千代丸の在します幕串を嚙倒してとや近着のんど爲たりしに忽地に横切り源東吾が立在たる木のもととして走り來ることに烈しき勢ひに脱るべくも非ざれば源東吾の閃りと躲して踏跟野猪の股のあたりとまたうのに踢てければ下地數箇所の鎗疵に過半弱りし野猪をれば踢られて撲地と臥すところを源東吾の得たりやおうと上しかよつて腰刀を抜より早く野猪の咽喉を大地も徹れと突留る急所の深疵に弱りて、其儘息の絶にけり當時多保野番太夫の喜び感じて前をいで源東吾に打對ひて其姓名を尋ねれば源東吾の此時ぞと思ひて白刃を納めてひざまづき我等ことい京家の浪人佐野源東吾常景と申もの御家に仕たてまつる佐野源五左衛門等とい元來舊き親類あれば彼人に吹擧を頼みて争で仕官の望を遂んと思ふをりから件の父子の伊勢の國へ趣きしと傳へさして其義及ばず斯る宿願あるにより三島の神社に參詣しつゝ下向の後に跟きて好き僥倖をいさしり此ひねよろしく御披露を頼とたてまつるとやに番太夫の如此くと山梶御前に聞こえ上るにさての妾も豫て知る源東吾にてありけるよみ故郷ある二親は安否もさそに聞かま欲しまづく館へ誘引ふべしとて其儘小田原へ召運させて長氏朝臣に如此くと委細く告げさせたまひしのが長氏深く賞美ありて其者の佐野鉢崎等の舊き親類ありといへば山梶も親さものあり況てや此度箱根にて比類なき働させしを知らず顔してやの置へさ呼出して召仕いんとて日ならず目見を仰付けられ一千貫を宛行なひれて近習れ中に加へられ又格別れ義をもつて山梶御前も面

會せぬまいて伊勢は動靜を尋ねたまへば源東吾の驚き恐れて扱もく人の行末あり隙て知られぬものいなし北條迄の、奥方を渡六が啞娘女の若梅にてありけりとい神あらずして誰り知るべき當初の物を言とざりしよ今の言語の爽然あるも又これ一つの不思議あり然れ共わざア等か拐擧ひて走りしを我が所爲なりと知られねば猶取入つて出頭せんと思へば言詞とたくみにして伊勢の様子久しく知らねど小臣のありし程の箇様くど我が好きやうよい慰めてぞ退さける〇さる程は佐野源五左衛門次郎左衛門等の伊勢の津よ赴きて鉢崎渡六が宿所を問ひしよ主のいつしの入替りて妻も二人の娘女も居らば是の如何よと驚き呆れて事の仔細と尋ねしよ渡六の先達て姫松を同伴ふて東國の方へ旅立しに久しく音信あかりしかば深雪小櫻の特わびて是もまた跡を慕ふて近頃東國へおもむきしと確乎と聞へたりけれは愈々いふかり疑ふて萬一途中よして行違ひし事もや有らんと思ひしかば父子諸とも引返して夫より宿々郷々を一つくよ穿鑿せしに二川の邊よ到りて渡六が死せしこと又姫松が勾引されし事その後半年ばのりを経て深雪小櫻が索ね來て愁歎かぎり無ありし由の仄よ聞こえさりけれは母と娘女の何地もさけんそれまで確かお知るもの無ければ源五左衛門次郎左衛門の打驚くこと大方あらず鉢崎氏の先達て姫松を同伴ふて此土地まで來たりしに我が遣すべき迎への者を待かねしものなるべし然るを病氣よ取詰られて終よ旅路に没故しの最痛ましき事になん夫さへ移るに姫松の勾引されて行方だに知るよしあさの不便ありさるよても深雪小櫻の便着なき身となりなごら我が方への索ね來せ又何地へか趣きけんそれはた不慮のことありて勾引されしか殺されしか是も亦知るべらふき我れ北條家よ仕へ

しより合戦あ暇あかりしのべ思ひながらに迎への人と伊勢へ遣さうりし事を今さら悔ひも
 其甲斐奇し右も左にも年數多恩義をうけし彼人又兎の毛ばりも酬ひと爲でなき名のみ
 聞く本意なきよと父子頼を合せつゝ不覺涙にかきくれしを然てあるべきに非されば遂に
 小田原へ立のへりて主君長氏山樞御前又鉢崎親子の事箇様々と告せしお次郎左衛門と
 姫松と結髪せしことなごの恥かやのして今さらやすの益なき事ありと思ひ返して語は
 さりけり○さる程山樞御前のはかあくなりし親の事行方も知れぬ母妹のとのおもひさ如
 此くと聞たまひしより悲しみ歎きて吾儕の幼稚さときよりして物いはぬ病より親も苦
 勞を被けたるに人となりての兇者も勾引されて生別れ御悲歎と重ねしこと世にも悲しく思
 ひしに良人につれて幸ひも數多れ人々敬まられ下足なき身とありしかば親姉妹とむかへど
 りて老樂よこそ養あひんと思ひしもれを生死は別れとありし痛ましきよ是の何とせんとば
 かりに伏沈まつ泣たまふ道理なれば長氏も種々慰めて酒又深雪母子のものゝ行方を索
 ね求めよとて次郎左衛門を近國まで遣はされたりけれども索ねも會はれ歸りしお山樞御
 前のいよすますく絶えぬ悲歎の日にまして病氣の床に臥したまふされば醫療に手を盡し
 加持祈禱かたの如く遺るかたなく勳へりたまへとも露ばかりの顯もあく憑と少く見えな
 まひし其甲夜の間山樞御前の長氏朝臣に對ひせたまひて吾儕が十五なりしとき觀世音の
 夢想の告に物いよこの成る身とあらば世の英雄に連添ふべければ短命あらんと示したま
 へり然るに吾儕が這回の疾氣の平愈すべくもあらば後々までも恩愛の心變らせたまひを
 母と二人の妹等が行方とたづねて人並に御憐れを被けたまひし猶この上の御恩ならんと

心細げは播口説また源五左衛門次郎左衛門を側ちかく招き寄せて仲のごとく遺言しつゝ終
 お慮しくなりたまへば長氏愁傷大方ならせ吾の妻あがら山樞の大功ありしものあるに彼
 菩提のためあとして頓て頭髪をさき捨て早雲と名告たまふされば其頃名だる大將坂東一の
 弓矢とり北條早雲とやせしこの長氏のことありけりされば其頃鎌倉の管領の陽は歸伏の
 氣色をあらひし下心よの北條家を討滅ばさんと謀られしを早雲はやく推察して源東吾常景
 を敵國の間者として鎌倉の爲体を見てまいれとて遣はる是より源東吾の私卒朽心早助と
 いふ者をたゞ一人召連れて竊に彼の地におもひきつゝ所々を徘徊するはごに一日化粧坂の
 曲輪にて彼が姫松か三浦屋は八橋といふ大夫にありて揚屋入りを爲ると見てけり我が勾引
 して志八に賣らせたりける女子あがら往時け姿容に一層優してその美麗しき得も語られ
 彼が曲輪は沈しし我の所爲あるを知らせぬに語らひ寄りて先つころの本意を遂んど忽地
 に最と賤太くも思案としつゝ廓のともがらに尋ねるに彼は八橋の突出しの當夜よりして來
 る容ごと一度も枕をかひさせ甚も強面もてあすものゝ廣き曲輪も比類なき容顔といひ
 意氣地といひ我さびけんと思ふ客の生憎に絶間あしと告るを聞て源東吾の呵々と打笑ひ傾
 城の手入せあらば晦日の月より稀ある初物我も一宵買ふて見んとて面を包み名を秘して八
 橋は逢ひしかば八橋の名指の客を誰なるらんと思ひしに源東吾あるを見て驚き慚て忙が
 しく逃隠れんとしたりしを源東吾引止めて自己もまた驚きたる体にもてさし語ひ慰さめ
 て其身北條家仕ふること箇様々と物語り往時といへば舊き親類争で他に見すつべき我
 等の妻もある心あら身受して誘引ん如何よくと寄添へば八橋の身を背向てはとりへ寄せ

涙含み御心ざしの嬉しけれども吾儕の伊勢に在りしとき親と親との結髪し次郎左衛門と
 いふ良人あり箇様くの事により東海道にて兇者よ勾引されて廓の勤そのとり病氣も取詰
 られし父の生死も得知らぬ悲しき夜毎に絶えぬ客をあれど一夜も肌身を委せぬ結髪の良人
 に立る苦しき節操にはべるのし然のあれども小田原へ斯ありはてしと告ても遣らぬ親の
 恥良人の恥我身の恥を思へばあり聴きけたまへと打泣て随ふ氣色ありしり源東吾の悔
 しくも是れ姫松の八橋の次郎左衛門と妹背の縁あるその事情をはじめて聞て事みな案も相
 違まづきバ嫉まじきこと限りも無けれども然らぬ体ももてゐして其夜の空しく立歸りさて熟
 々と思案を爲るに三浦屋の八橋の姫松なるを次郎左衛門父子の者よ知られず渠奴等が身
 請するあるべし免ても角ても我が心お隨ひぬ傾城めを他人の詠よせんこと男子と産れし
 甲斐もあし所詮主君よ聞こえわけあば山梶御前の妹のことなり必ず身請したまふべし其時
 よこそ姫松を索ねわてたる功をもて我等が妻よ給ひきかした願ひゆさば事なるべし然とさ
 の次郎左衛門よ鼻をわかするれみならで主君れ覺も異あるべく我が年來の思ひを遂るこれ
 よ優しがる事あらんやと吐の裏よ計較つゝ小田原に立歸りて主君早雲にやすやう鎌倉の爲
 体箇様くくにゆの爲差こともいひす然るに一つの歡喜あり山梶御前の御妹姫松との
 小臣も豫てよく見知りしつ化粧坂なる三浦屋にて八橋といふ太夫になりて今現に彼所に在
 り夜毎に絶えぬ客なれど只強面のみもてあして肌を汚さざと風聞あり最痛ましき絆にこそ
 と秘びやりに告げまうせば早雲聞て點頭さまひ開不便なる事ぞかしと宣ふのみにて其他
 に仰するよしも無ありしり源東吾の手持るく連侍へ退きけり斯て其後早雲の郎次左衛

門と招び近づけて鎌倉より歸り來つる源東吾がまうせし事如此くありと説示して汝化粧
 坂へおもひきて彼の八橋とやらんいふ傾城がいよく姫松も相違なくバ身請して召連れま
 むれ彼の流れの里よ沈め身委せせと風聞あり健氣あることぞかし然れば亡妻山梶の遺
 言に任せつゝ我が側室にして召仕のん事の最初の源東吾が見出せしとて告げたれども我ま
 た思ふむねわれは是等の事を彼よの委ねを竊に汝に命するなり彼所の敵地のこときれば好
 くせよのしと仰せつゝ金庫の有司より黄金千兩とりよせて次郎左衛門に交付したまへバ次
 郎左衛門の事の由よ且おとろき且喜びて懸て宿所に退きつゝ父源五左衛門よ主君の仰箇様
 一と一伍一什を告しかバ源五左衛門首を傾け彼の姫松の過し年和のと妹背の縁を結び
 て父渡六と契約の証文を取交せしに序あければ夫等のよしを主君へ申上ざれば知ろし召さ
 れぬも道理あり開免され角もわれ主君の側室にせられん彼の女子の幸祿あふんを汝の
 更あり姫松も思て誤らなき機よ心を得させて同道いたせといはれて打笑ひ次郎左衛門仰
 せにや及ぶべき必ず案じたまふと答へて懸て其事の準備をとと急がせける○斯在しや
 どに源東吾の八橋の身請れ事と次郎左衛門よ分付られし其折次間よ竊聽して憤はること大
 かたならぬ我が見出して注進したる女子のことと次郎左衛門お分付らるゝ如何なる道理
 を依怙も負もともよる斯まで物を知らぬ主君に鼻とあわせて次郎左衛門奴に自滅と取ら
 ざる計略もあつと胸よ手をおく悪心に獨まくらを碎きたる扱まゝ佐野次郎左衛門常命の若
 黨柳平といふ者と下部四五人引連れて次の化粧坂の廓に赴き三浦屋の主人何某に掛合ふ
 て八橋の身請の金子一箱をぞ交付しける八橋の思ひ懸けなき身請のよしを聞しより歎き彌

増こころの悲しき是迄辛くも脱れつゝ他人に任せぬ身を今更に請出されて阿容くど立し
 貞操破るべき只速かに死なばやと思ひ詰し待つてまべし然る時ハ咎も無き親方に損を
 被けて亡後までも恨まられん所詮まづその客に出會て我身の事情を委しく告て身請を止め
 夫にても留聴れをば請出して行く途次に自害とせんと思ひ返しつ涙を禁め化粧を直して
 然て其座席に立出て但見れば思ひのけ無き身請の客ハ結髪の良人次郎左衛門ありければ
 遣のともいふにどばかりに羞りのしさと嬉しさに顔々擡げ打騒ぐ心をおさえて伏沈み雲
 時涙は搔暮れり次郎左衛門の然もこそと前を寄りつゝ慰めて別れし後ハ合戦ハ間暇無け
 れバ事絶て伊勢へ迎ひの人とどら遣さうし心苦しき箇様くと物語り主君の奥方山柅御
 前ハ八橋等が姉若梅あること嚮に主君の仰せに由て鉢崎一家を迎へんために伊勢の津に趣
 させし其事の箇様くと渡六が病死の事そのうち深雪小櫻の跡を慕ふて二川まで來つゝ件の
 田を聞て伊勢へも歸らる何地もさうん行方も絶えて知れざりしを山柅御前の嘆かせまひ
 て近頃没故たまひし事又源東吾が圖らるも御身の廓中ハ在りけるを見出して如此くと出
 君も申上しうば早雲公憐れたまひて苦海の中に一人の客にも身を委せぬどかいふよしの
 虚言あらまば世の中ハ比類まれなる女子あり山柅が妹ならバ請出して傍女にせん竊に召連
 まるるべしと仰せと承て來つるありと一伍一什と囁き示せば八橋の姉若梅の行方をはじめ
 て知るものあら會ふよしも無き夢の跡それたに憂さを父渡六が空しくなりし事のおもひき
 母と妹ハ神風の伊勢路を出てのち遂に行方知れせと聞くごとくに絞るにあまる袖の雨身も淫
 くばかり堰上て差込ひ癩に陰方もあき沈みたる心の悲み就れ疎りのあけれども心得びなき

身請のおもひき身と吾儕の親達の結びまひし妹脊の縁よし堅き約束そのをりに手形の
 証文どりののせしと大事にせよと父様の交付まひし筆の跡さきに伊勢を首途の其時よ
 りして肌身を離さず護身符蘘を納れてあり主人の仰なればとて妹脊のなを引割て側室小
 屋にせられんを身何とも思ひを辛や辛い苦海の中の中に夜毎替る客の數委すべき身と
 委せまに貞操を立し誰が爲ぞ吾儕が思ふ百分の其一つだも身心の實に實があらバ斯まで
 よ恨まらる情や二人の親の生死の別れハ同じ此世の名残結髪せし男子にぶにも捨ら
 れし身の久後とても頼母しからぬ世の中に猶存命て何かいせん然じやくどつと詰し女子
 ころろの一筋に櫛笥の剃刀とりだして己に自害と見えしかバ次郎左衛門ハ驚きて袖平諸共
 左右より推止め諫め賺して漸く刃を取投させ我等とても今さらハ心變りて身請のことと思
 へぬにあらねども密に事の序なけれバ結髪の事なきハ主君へ申上ざりしを此期におよび
 て箇様くと申さるべき事にハ移らず父源五左衛門も此こととのみ最と甚う心ぐるしく思
 ひたまへり然ればとて今此所にて身請の自害するからハ何をもつて身請主君へ申上けを致さ
 んや我のまあらで我親人も身請咎めを蒙りて切腹をがさ爲たまふならん身請の心一つをもて
 結髪の間等ハさふなり身不慮の難儀を被けなバ夫を本意といふよしあらんや是までの縁
 と思ひ諦らめて早雲公へまわりたまへ一旦まわりて其後ハ我等と縁にしと結びしよしを詳
 細に身請の口づりら箇様くと聞こえ上げなバ仁義に厚き早雲公いふのでの家來の妻と奪ふ
 て側室にまたまふべき時宜によりあバ我が妻に下したまひることもあるべし然りとて
 今更に我々父子のさへさつて住君へ申あげのたき譯ハ只今いひつる如し短氣あること爲た



四十四 ますふちと首詞と盡して諫むるにぞ八橋漸く涙をどいめて心の中に思ふやう現に此まゝに自害せば其人の爲に悪かるべし彼所へまゐりて目前早雲公に聞こえあげて猶聴かれず其時に自害するとも晩きはあらじと漸くに思ひ返して遂にその義にまかせけり〇さる程に佐野源東吾の主君を恨みたてまつりて計略と案せる折から又彼の兇者志八の源東吾の北條家にありつさし由を聞いて祝儀に金子をねたらん爲に遙々尋ねて來にけれ源東吾の竊に歡喜我が計較を隔やき告げて閑談時を移しつゝ腹心の若黨早介に密書を持たせて鎌倉へ遣しつ腰越の出丸を成る管領家の足輕大將猪野目井九郎といふものに内通を爲たりける猶くひしく

次に見えたり

第六回 八橋及佐野次郎左衛門身の脩りの事

されば源東吾常景の八橋の身請のことより次郎左衛門と深く嫉みて障碍せばやと思ひつゝ計略を案するに我が鎌倉に在しころ管領家は物頭に猪野目井九郎といふ者あり彼の組子を卒へて鎌倉中を廻りつゝ他國より來る旅人に怪しき者の有るときは引捕へて詮議するを身の勤とするものあれば彼の井九郎が手と借りて次郎左衛門を支へさせ我が憤はりを晴さんものをと心の中に計較て内通の密書をまたゝめ腹心の若黨なりける朽松早介といふものを鎌倉へ遣しける程に早介の次郎左衛門に先立て鎌倉に赴きつゝ竊に猪野目井九郎の件と密書と交付にけれ井九郎の不審しく思ひなぐらも披きて見るに元より知る人あらねども北條家の近習の武士佐野源東吾といふ者が内通の密書にて化粧坂なる傾城八橋の主君早雲の奥方ありし山梶彦前の殊なるよし近頃そのこと聞こえにけれ早雲竊に請出してさ

らに側室にせん爲に佐野次郎左衛門といふ者を遣すことはや今日明日の間に在り其時にも此儀を以て勢に手分とさだめられ次郎左衛門を討て取り八橋を引戻きて人質にまたまの早雲たちまち面目を失ふのまにあふまゝて彼の八橋を娶らんために下知にこそ隨ふべけれ我儀の故あつて主君を恨むるよしあれは勢に注進するものありと一紙の起請を取添え又他事もなく書さりけれ井九郎深く歡喜く猶早介にその日限と次郎左衛門の面体と年の齡を尋ね問ふと引手物を取らせつゝ頼と返書を認めく小田原へ還し遣し時と移させ手分しと次郎左衛門の鎌倉へ來るを遅しと待たりけるやきに源東吾の内通のため早介を鎌倉へ遣せし其折に又思ふやう八橋を管領家へ奪ひとせく憤はりを晴すの好さよ似たれども年來思ひを懸る女子を他人に取らせと一生涯本意を遂げせバ悔しけるべし頼母しりらぬ主どりしく身を窮屈に暮さんより事の紛れに八橋を搔さらひせく身退さ彼と夫婦にあらざりせば男子と生れし甲斐いなし如何に爲べきと胸に手を當ぐふたゝ案せる折から又彼の兇者志八の源東吾が北條家へありつきたりと傳へ聞て祝儀に金子をねぐらん爲に三河の國より來にけれ源東吾のこれ究竟と酒を飲ませ物を取らせて這回の巧を説しめし早く彼地ににおもひさて次郎左衛門を取固まれて事の難義に及んとき和主の早く八橋を搔さらひ影を隠して如此の土地に忍べ我の後より軍用金を盗み出して逐電せん其事うまく成就せば骨折代の望にまかせん出會どころの如此くぞとて心の機密を耳語けバ又もや懲りぬ不敵の志八一義におよばず身と起きてとや立出んとする程に常景をバしと推止めて準備の一腰さま出せば志八手早く受取りて其儘腰に落しざま裾引からけて辭別ひ鎌倉さまでぞ急ぎ

りる是へ扱合さ佐野次郎左衛門常命の若黨袖平等を隨へて化粧坂の廊よおもむき八橋の親
 方に身請の事と譚合に其身代金の數多あるを聊かも厭ひねば相談たちまち整へども八橋の
 只うち泣いて假令主命あれどと結髪の良人なる次郎左衛門に得添いれど姉若梅の良人な
 る早雲との側室とあらば盡せし貞操もその甲斐なし只そみやうに死なばやと己に覺悟を
 究めども良人の難義とあるよしを聞て此處に自害も得あらば早雲のみに見參の折に是
 等の由を告げく其座を去らば死なんとも思ひ決めくやうやくに準備の駕籠に乗移ると
 も知らせし次郎左衛門の頻りに諫めこしらへたる八橋の漸得心の氣色に深くよろこびく
 袖平等の供人に駕籠の左右を護らせく小田原さし立歸る道路のゆく手の小松原人家を離
 る折しもあれ四方に起る捕人の兵卒前後左右を追返まさそれある傾城八橋と北條家に所
 縁あるものあるよしと慥に知り然るに客の名を告げせ又身の代と厭せして竊に身請せし
 ものと北條方のまわし者佐野次郎左衛門常命あるよし知る人ありて注進せり斯いふ者を誰
 とか思ふ管領家の御内におい々然る者ありと知りれたる猪野目井九郎とて我の事ありアレ
 逃すやと呼べりたる下知に隨ふ捕手の大勢得物くを引提く遣さし遣じと舞きたり次郎
 左衛門の緯のはや發露たれば今さら脱れぬたしと思ふにぞ中々一言の問答も及ばず
 し八橋の乗物より袖平等を附添ひして群がる敵も見つて入り面もふくす闘ふたり敵も味
 方と比ぶるべ只九牛の一毛もて適ふべくも有りされば昇夫ら驚ろき恐きて道路のはどり
 又乗物をさら捨てはや逃失たり折こそ好けれと兇者志八最前より動靜をうらふ木蔭を出
 て八橋の乗物目懸けく立寄るを支ゆる袖平ひるまぬ志八たひひ刃を抜合せく丁々はつし

七十四 木鉢廻者長兩萬姫

と闘合ふたり斯在ところよ井九郎の携着も手強き次郎左衛門を兵卒どもに打委し先へ廻つ
 て八橋を駕籠よりやにひよ引出し疾くも小腋を搔込んで走り去らんとするはどに次郎左衛
 門の信と見て咄嗟とおもへど程遠し陸方もあき折かたに落たる敵の種ヶ島これ究竟と取わ
 げて火蓋とせうと切て發せば狙ひたがひを井九郎の右の脇腹うち抜てあまれる丸の八橋の
 胸骨碎く急所の痛手は是彼ひとしく死んでけり然れば又袖平の志八とたふのふはどよ送ひ
 に淺瘡を負ふたりしが袖平の思ひも芽萱も脚をすくひれて忽地はたと轉ぶところを志八
 得たりと覺えおけて起しも立す切伏せて終に刺止をさどほどに稻叢かげの邊より露を出
 一個の雜兵聲とも被けを志八の領首つらんで捻たふし其まゝ被くる用意のはや細かひを
 高く走先あげて引たてく一散西をさしてぞ走去りける元來はげしき闘争の最中にてあ
 りけれバ次郎左衛門の志八の事を絶えて知らせして漸く敵をさき散らし打留たりし井九
 郎の死骸のはとりよ來て見れば無慙あるある八橋さへも余るる彈丸に息絶たりこのそも如
 何にと呆れはてし且憐れと目悔めども今さらそのかひ非ざれば敵の首級を取らせしと思ふ
 ばのりに八橋の首をはやく搔落し三尺手拭ひを解きて楚と包みて腰よつけ討死したる袖平
 の死骸を見かへる暇乞ひ辛く其場を脱れても八橋さへも討留たれば立歸りて主親に申譯せ
 んよすがもなし腹のさ切て死あやと思ふものから夫もまた犬死に似て無益あり惜しから
 ん身も存命へて深雪小櫻が行方を索ね環りあふ日よ由をつけて件の母子に討れて死なん然
 りゆれども我もある親の難義も今更に思ひやられて痛ましやと不覺の涙にのさくれしを思
 ひ返して定めなき旅より旅より日よわたりて只彼の深雪小櫻が所在を索ねて經めぐりけり〇

されば又次郎左衛門が供よさらたる隸卒せもの辛うじて小田原に遁歸りて如此くと注進
 も早雲これを聞たまひて然らば八橋が事のおもひきを早くも敵よさられて事の難義に及
 びし折次郎左衛門の敵の大將猪目野井九郎と討取し大方あらぬ拵了あれども彼の姫松の
 八橋さへに討く首級を引提て遂電せし心得がたし是に定めて譯あるべし疾くく緯の
 おもひきを親其源五左衛門に尋ねども可きものなりとて老黨蟻竹主馬之進に内意と合めて
 次の日佐野の宿所へ遣したまふ程に佐野源五左衛門時命の次郎左衛門が事よしを
 傳へ聞つゝ大に驚きさし多勢を切散らして捕手の大將井九郎を討取たはとあらば兎
 も角もして八橋を誘引ふて歸り來べきに八橋さへに手に被けて其所より遂電したりける次
 郎左衛門の若氣のあやまり結髪せし女子を主の側室よせられんことを互に心愛くおもひ事
 の難義よふよふに至りて八橋を手に被けて其身の出家せんため遂電せしよぞわらんせら
 ん由なき所爲をしてけりとも獨こゝろを痛むるや途に次の日主君の御使として主馬之進惟政
 打向ふと聞こえしおの扱の我が上なりけりとして源五左衛門覺悟を極めてはや其準備を爲る
 折柄主馬之進出來りて主命を述知らせ返答いふに詰寄すれ源五左衛門もも騒がず
 八橋と手に被けて遂電しる悴の不所存まうしわけの斯の如きといひつゝ、腹帯ひき解け
 覺悟の切腹鮮血のくれなる主馬之進おろそか勤る手負の深痕に届せ姫松の八橋の次郎
 左衛門と夫婦の結髪せし事のおもひき其時鉢崎渡六と爲取替たる手形の証文すなりち此處
 にと取出し仔細の斯のさきとくも然りとも今更に譯いたちがたしと思ひしもゑよ
 此切腹主君と思ある渡六夫婦へ此身ひとつを振分て我から急ぐ死出の旅行御披露たのみ奉

つるといふを末期の一向にて其健息の絶えにけり○さきバ又佐野次郎左衛門常命の八橋が
 首級をたづさへ深雪小櫻にめぐり會へんとて遠近を経歴るに殊更に怪しかりし數多の月
 日を送れども首は活るが如くにて露ばかりも腐爛れず是によりて最初より包ましましに腰
 につけて關の八州遣りちく奥州の果までも凡三年の旅行をして茲年の冬の下總より武藏の
 方へ歸るとく船橋のはどりなる鉢崎の里を過るほどに雪さへ甚く降積みてはき黄昏にあり
 しの、バ道路のはどりの一軒家なる柴の戸を打敲きく其夜の止宿を求むる折ら跡つけ來る
 捕人の兵卒雲時木蔭に退ぞきて猶も容子をうかいひけりさるは途に此の一軒家よ最も貧し
 く住詫たる主人の深雪ありければ小櫻もまた立出て絶て久しき對面に迭のうへを問ひ問ひ
 れて待遇大方あらざれば次郎左衛門の今更に我が本心を告げかねて腰よ着けたる首級を取
 出し箇様くの事により結髪せられたる姫松の八橋を我が手懸けて討留し恨むるよし
 の有てあり然るに其時此首級を棄んとすれば五体縮みて聊かも歩行かれき又どりわぐれば
 最がろく我が身の縮むことも無ければ已ことと得を腰に着けて旅より旅に月日を送りて三
 年にありし今宵たい今御身母子に環り會ひしに終に脱れぬ業報あらん疾くく討て亡靈に
 手向たまへと座を占て覺悟の体を健氣ある深雪母子が八橋の色も變らぬ首級と見つ最期の
 よしを聞からに這いそも其麼とばかりに共音に慟と伏沈み聲をかきりに歎きしを思ひ返し
 て納戸より良人の紀念の雙刀を取出しつゝ小櫻にも其一腰を分與へ情なや次郎左衛門たと
 へ恨その有ればとて恩を忘れて姫松を討し非道の天の龍娘女の警敵姉の仇勝負くくと詰寄
 すればいふにや及ぶと次郎左衛門立上らんと爲るほどは戸外に伺ふ源東吾早助つれて走り



十五

いり我儂主君の仰よしたがひ久しく索ぬる次郎左衛門只今此所まで討せての歸りて主君へ
いひわけあし次郎左衛門の大罪人旅宿へ引いて糺明せん又深雪どの母子の隠れ家近來仄
聞へしかば我儂下見ままりしあり此由さつそく注進せん後日の御沙汰を待ちたまへッレ
咎人を引立よと仕たり顔ある下知につれて早助もろとも組子の兵卒次郎左衛門の左右よ
り小腕どつたる羽がひ縮ひき立てく雪路を旅宿へとてぞ引てゆく其日も己は暮六ッの諸
行無常の鐘のこゑ佐野の渡りよあふねども降る白雪の小止なく寒さを最とまさりける折の
ら先刻に宿どりて納戸に在りし一人の修行者寒さ堪へぞ立出て深雪らに打對ひ彼所に在
りて漏聴けは深き悲嘆の有るやん卒々回向しまゐらせんといひつゝ四邊と見返りて持佛
のはとりに昇居たる八橋の首に打對ひて鉦うち鳴らし念佛の聲すみわたるその程に活るの
如き八橋の首のうしろに捻向きて背向になりしぞ不思議なる深雪の夫にも心も付かず回向
畢れば小膝をすゝめ願ふくも無き今宵の追善聖僧に御宿をいたせまかきも煖まるるす猶
木もあま昔時ものくや鉢の木の雪の中める梅松櫻是を今宵の饗應にたき木となさん御僧よ
煖りままといひかけく鈍とり上げくも流石實に梅の諸木の姉若梅かの常命の物語りにく
今日はじめ知る其身の榮枯松の太夫の八橋姫松千歳のよひひ其甲斐なく貞操をくく果
敢あき最期ゆとに残りし小櫻の春を遠き冬木立生死二つと異れども變りぬものい不仕合
思ひまのせ不便やと不覺の涙にのさくを思ひ返まき鉢の木を一所によせく鈍とりあ
はし已に伐らんと爲るはせに旅僧まばしと推禁め天晴めでなき焚火の饗應我の常盤の姫松
より生る櫻を宿の花今夜を閨の狭むしるを暖めさせて夜寒と凌がん此方へ来よと小櫻の手

を引たて、いりあくも納戸の内に入りしりは深雪の咄嗟と驚ろきて扱ひ彼の出家こそ人の娘女を勾引す高野ひじりで在りけるよな得こそい遣らじと慌忙しく身を起さんと爲る程に戸外の方に聲高くやよ待ちたまへ深雪どの我儕主君の御恩によりて今宵とらす父の警又姫松の八橋の警なる佐野源東吾わるもの志八私卒早介一人も漏さず討取つゝりと呼はる聲に立止る深雪の信と見返りて然いふ聲は次郎左衛門彼の源東吾を父の警よ、姫松が仇ありと語れる、事とぞ心得ねど不審る言詞もをこらぬところに其譯告げんと呼ばれて何時のはどにか主馬之進奥間より出て袖かき合せ初てい深雪どの我い蟻竹惟政あり姫松の八橋どのと次郎左衛門の像てより結髪わりしよしを主君い絶て知りさまいす彼の身請を致せとて次郎左衛門を鎌倉へ遣しよまひし其折に不慮の事もや有らんかと我儕主君の仰を承け窃に彼地へおもひきて次郎左衛門が井九郎へ打し鐵砲の彈丸あまりて八橋どの、あへなき最期を見届るるのときあらす源東吾に一味の兇者志八を生捕て若新どのと姫松どのを勾引るる事のおもひき又鎌倉へ内通せし源東吾の巧の條々すでに白状しりしかば是彼重き罪科に行なへるべき者されども我君賢慮あるを以て志八をバ我儕に預けられ源東吾を暫らく赦して仍召仕いれたりしかり然るに佐野源五左衛門の我子の科を身に引受てとやりて命を落せしと我君深く惜ませたまひて三年このかた次郎左衛門の行方を索ねさせたまふに所在いたえて知せずして却て御身と小櫻どのと此地に隠れすひよしの近頃はのりに聞えしかば主君の内意と承たまひり面体知つたる源東吾を案内のために同道せし御身母子に討たせん爲あり然るよ佐野源東吾の次郎左衛門は環り會ひとや引立て來にけきバ我儕ひそかに歡喜で源

東吾の悪事のおもひき悉とく敷へたて、次郎左衛門は討せたり其れのみならず御身母子の爲にとて窃に後より引かせ來つる彼の兇者志八と源東吾が私卒早介さへは漏すこと無く次郎左衛門の手に懸けさせ然て親のため、のため結髪之妻の爲は恨を復せし功より次郎左衛門の召復されて本領安堵するものなりと一伍一什を説示せば疑がひ解けし深雪がよろこび然るにとも小櫻を無体にも興へ誘引ひし彼の旅僧こそ心得ねど不審る言詞の下よりもと疑念の道理あり北條早雲長氏入道對面せんと名告のけく奥間より出る以前の旅僧小櫻後に隨へく悠々上座よあほり往時最明寺時頼の故事にあらひつゝ、敵地の虚實と探らん爲に諸國と經廻るをりも折雪のゆふべの鉢崎鉢の木環り會ふる姑めどの世をこの所へ通れしに只これ良人の遺言に隨ふよしを小櫻の物語りよく初め知り然ればとく今早雲の自親むかひに來つる上り得もや違背の有るべからず只痛ましき姫松の八橋が最期あり君傾城にひ比類なき貞女の菩提に手向の鉢の木その返報の相摸に梅澤武藏に松山下總に櫻の庄あがく密附して菩提を問ひせん相違わらざる自筆の狀佛果を得よや八橋と遺るゝた無き名將の深き惠ぞ有がたき早雲重ねて宣まふやう最初我が伊豆の國を討取りしと若梅の山梔御前が計略によつくり然るゆ彼と不幸にし世を蚤く去りしかば責めるその妹を以て我の後添へに爲とやと彼の八橋と次郎左衛門と結髪せしことを知らで彼を非業に殺せしことを悔むといへども今と歸らず我に一人の妹あり名を萬兩と呼はるたり我身東國に下りしころ都のうちには潛むせ置しを近頃迎へどりこれをも未だ定まる良人もあし斯在は妹萬兩の名を姫松と故ためさせて次郎左衛門に配偶すべし又小櫻の我娶りて後妻の妻とせん各々辭退すべし

四十五

ふすと世は頼母しく聞こえたまへば深雪小櫻次郎左衛門齊一よろこぶ出世の首途羨まぬもの
のあかりけり斯く其後主従の婚姻は出度とのひければ深雪と早雲の姑めとく其待遇大方
あらま次郎左衛門と又早雲の妹婿とありけりは蟻竹主馬之進と相並んで家老職を承さま
り高録其身に餘ること悉八橋の類ひまれある貞女の徳によるものなりとく永く菩提をとひ
しかば子供數多まうけつゝ其家久しく榮けりされば北條五代の繁昌とる早雲の武略と起り
くそれ仁徳よはじまれり君仁われば臣また忠ありまことよ日出度ためしならずや

姫萬兩長者迺鉢木大尾

明治廿二年一月廿五日印刷
全 年一月廿 日出版

定價七十錢

著者 故曲亭馬琴

發行者 菅谷與吉

神田區元岩井町卅七番地

印刷者 宇都宮榮太郎

神田區花田町壹番地

日吉堂

日本橋區人形町通堀留町二丁目十七番地

發兌所

日吉堂

神田區元岩井町

日吉堂出版書目

名譽長者鑑

實價拾錢

雲霧お辰青木夕榮

全拾錢

刺繡小常凌雲女丈夫

全拾錢

大岡政談於富與三郎實記

全拾錢

人情美談野路花

全拾錢

慶應水滸傳

全拾錢

廓雀小稻出來秋

全拾錢

清元常盤津佐和理集

全五錢

文句入都々一集

全五錢

端唄都々一集

全五錢

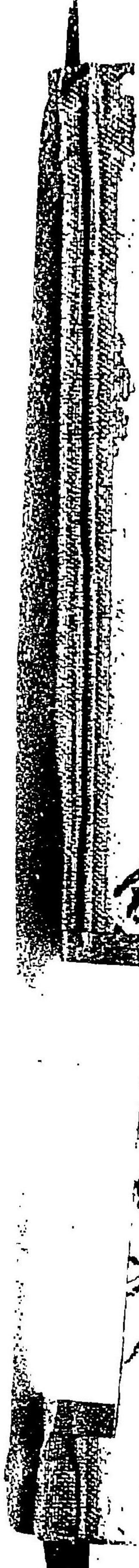
新撰造化機論

全五錢

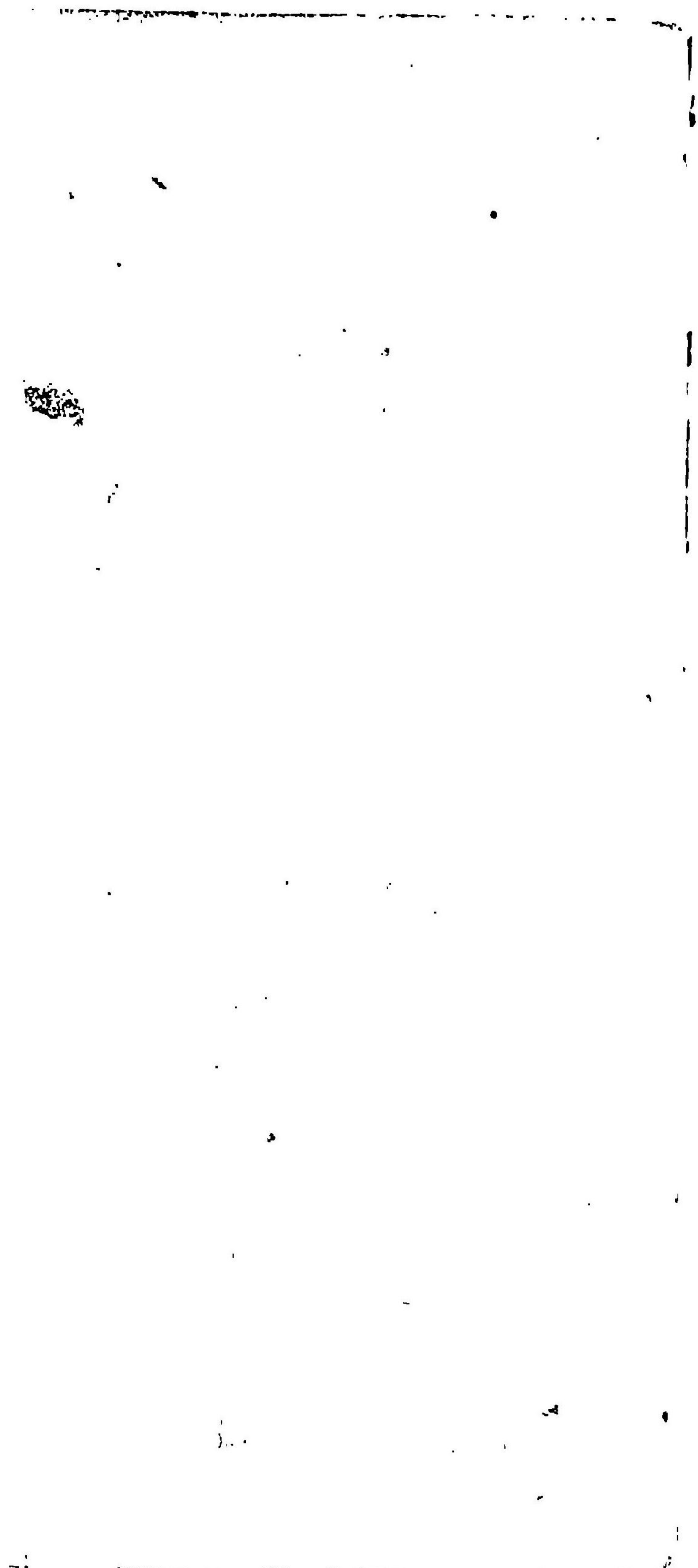


明治廿四年二月末
齋菽子藏

齋菽子藏



羅浮山志
卷之三
雜錄



089629-000-0

913.58-Ta624h

姫万両長者酒鉢木

曲亭 馬琴 著

1889